「オホーツク文化」と擦文文化の接触、同化・融合説

－展示図録「模式図」の成り立ちと、その実態－

柳澤　清一

はじめに

通説の編年案によるとオホーツク文化は、道北でも道東でも、9 世紀の後半以降、擦文文化の強い影響を受けて衰退・変容するとされている。そして、そのプロセスは土器変遷の地域差を反映して、自ずと異なる経路をたどると考えられている。道北の島嶼部では、「オホーツク式→元地式（広義の「接触様式」）」へと変遷し、その後は擦文文化に席巻されて消滅するとされる。これに対して道東では、論者によって細部の違いはあるが、大方は、「ソーメン紋土器→カリカリウス土器群→トビニタイ土器群（Ⅱ・Ⅰ-Ⅱ：Ⅲ・Ⅰ）」の順に一部で重なりつつ変遷し、やがて擦文文化に同化・融合、または吸収されると想定されている。

こうした異系統文化の接触に伴うプロセスは、言うまでもない事であるが、正確な編年秩序に立脚し、同時代の文物を用いて通時的に細かく検討されなければならない。だが通説の北方編年は、道北・道東を問わず、果たして同時代の文物を用いて精密に編成されているであろうか。例えば道東では、8 ～ 9 世紀の末頃に擦文前期文化の影響を受けて、オホーツク文化（ソーメン紋土器）が急激に衰退してから、その後は 12 ～ 13 世紀まで 300 ～ 400 年を要して、「接触、同化･融合」のプロセスが徐々に進行すると想定されている（宇田川 1988・2002・2008、右代 1991・澤井 1992・大西 2006・瀬川 2005a・b ほか）

これは本邦の先史考古学史上において、未だ証明された前例のない稀有の文化的、社会的な現象ではなかろうか。小論では、このプロセスを模式的に示した博物館の展示図録や、概説書などに掲載された様々な接触、同化・融合（吸収）のモデル（模式図）の検証を通じて、通説化した道東「北方編年」の認知されていない実態を明らかにしたい。

1．河野広道の北方編年観と「棲み分け・接触・対立」文化論

オホーツク文化と擦文文化の並行関係を想定し、今日の北方編年説の原型となる学説を提出したのは河野広道であった。1947・48 年のモヨロ貝塚の調査から、網走・斜里・知床方面の調査活動を経て、オホーツク文化の残存を説く山内説（山内 1933・1939）に対して、擦文文化の存続を主張する戦前からの学説（河野 1935）を改めて提示した（河野 1955･1958）。両文化の「棲み分け」と「接触」、ないし「対立」を想定したこの学説は、学史上に広く周知されている。しかし、その成り立ちや内容についての検討は、これまで等閑に附されてきたのではなかろうか。

1）『北海道先史学 12 講』（米村編　1949、北方書院）の年代観

米村喜男衛が編集したこの本には、河野広道の「北海道の先史時代」という小論考が掲載されている。

モヨロ貝塚の発掘成果をふまえて、一般向けに北海道の先史時代を通観したものである。内容的には最新の資料をもとに、オホーツク文化の新しい年代観を述べている点が特に注目される（河野 1949：31-43、( ) の挿入：筆者)。

(1)「(オホーツク式土器は)2000年前から1500年前くらい前に樺太､北海道東北部に流れてきた。」

(2)「北海道では1500年から900年前ごろ、東北部にオホーツク式で代表される民族と、縄紋土器系の民族（北大式・擦文系）があったわけです。」

(3)「オホーツク式土器は、(中略) 8、900年前以後は消えてしまい、刷紋土器（擦文土器）も中途でなくなっております。」

まず、オホーツク・擦文の併存を想定している点、そしてオホーツク文化の存続年代を計算上A.D.489 ～ 1049年ないし 1149年、すなわち12世紀中頃の平安時代に収まる、と捉えていたことが注目される。それではこの1049年ないし1149年という年代は、どのような根拠をもとに導かれたのであろうか。河野と共にモヨロ貝塚の調査に参加した名取武光は、この論考の一年前に『モヨロ遺跡と考古学』（名取 1948a）を著し、オホーツク文化の「実年代」の一端が、11号竪穴住居址（以下、竪穴）出土の「遼時代の素焼土器」からみて、11世紀初頭（A.D.1017）に相当する、という画期的な年代観を明らかにした。この年代はそのまま、河野が想定したオホーツク文化の存続年代内に収まる。他方モヨロ貝塚の調査で発見された、北方系の金属製品や装飾品に関しても、駒井和愛や原田淑人によって「遼・金」時代に属するという鑑定が、すでに公表されていた（駒井 1948a・b、児玉 1948：54-58、名取 1948a：87-89・1948b)。

したがって河野は、モヨロ貝塚調査の最新の知見をもとに、擦文・オホーツク文化の関係性と年代観について、早々に新見解の発表に踏み切ったと考えられる。また、区切りのよい数百年前という数値を示しながら、オホーツク文化の終末年代に100年の余裕を持たせている点が注意される。これは10号竪穴出土の「遼時代の素焼土器」に伴うオホーツク式土器が、モヨロ貝塚の「黒土層」（ソーメン紋土器期）ではなく、「貝層墳墓」のそれと「ほぼ一致している」（名取 1948：前出）と指摘していたことに由来すると推察される。

さらに河野は、巻末に附載された座談会、「モヨロ貝塚を探る」の席上において、オホーツク文化と擦文文化の関係性について、次のように発言している（米村編 1949)、(下線・傍点・( ) の挿入・ゴチック文字：筆者)。これは学史上に全く「忘失」されているが、両文化の接触、同化・融合を想定する通説編年のルーツをなす発言として注目されよう。

(1) モヨロ文化は、「おそらく鎌倉時代まで千年以上続いたと思われます。」

(2)「オホーツク式文化は縄文土器時代にはなく、擦文になってから併行して見られる。」

(3)「縄文（縄文を施す北大式）の末期に擦文とオホーツク式文化がモヨロにやってきて、異なる文化と民族が併行してこの地帯に住んでいたことが想像されるのです。」

(4)「オホーツク式文化を主として、まれに擦文系がある。また擦文文化の竪穴に稀にオホーツク式を混入しているものが非常に多い。文化要素、経済交流が相互に行われたことが明らかに見られます。文化は違っていたが、どちらもある期間おだやかに住んでいた。」

(1) は、少し紛らわしい記述である。先の検討をふまえると、オホーツク文化は平安時代のうちに終焉する、という見解の表明したものかと思われる。(2) ～ (4) は河野学説の核心部分に相当する。モヨロ貝塚においては、擦文･オホーツクの両文化が同時に出現し、「ある期間おだやかに（併存して）住んでいた」。ただし、オホーツク文化は「800、900年前以後は消えてしまい」、擦文文化も中途で無くなる。そしてその頃より、「日本からの漆器、木器が非常にたくさん使われるようになった」、と捉えられている。

したがって両者の併存的な関係も、平安時代（1049 ～ 1149 頃）の内に終焉する。擦文文化はその後も存続するが、本州島からの中世的な生活様式の流入を受けて消滅する。その結果、「北海道は歴史時代に入り、日本文化の進入時代」を迎えるに到った。後に『斜里町史』や『網走市史』（河野 1955・58）で論述された北方史の基本的な枠組みは、このように 1947 年の時点で構想されていたと考えられる。

さらに「文化要素、経済交流」の記述が、網走市周辺における土器類の出土状況をふまえて、具体的に立案されている点も注目される。オホーツ式に稀に伴う「擦文系」と、擦文土器に稀に混入するオホーツク式とは、どのような土器を指すのであろうか。実物は残念ながら発表されていない。しかし、『斜里町史』の遺跡紹介（ピラガ丘遺跡など）を参照すると、後者はトビニタイ土器群（菊池 1972a）のⅠ・Ⅰ-Ⅱに相当すると推察される。それではトビニタイ土器群Ⅱについて、河野はどのように捉えていたのであろうか。その点は後節で改めて触れたい。

さて以上の検討から、オホーツク文化の終焉年代に関する河野の考え方は明らかになった。ではオホーツク文化初現の年代については、どのように想定しているのであろうか。再び、座談会での発言に注目したい。モヨロ貝塚の 10 号竪穴（佐藤・駒井 1964）の調査について河野は（( ) の挿入：筆者）、

(1) この竪穴は「床面が二重に区別されるので、炉の部分を見ると四重になっているのです」

(2)「下床から出る遺物は平安期（A.D.794 ～）のはじめから奈良朝期（A.D.710 ～ 793）のものと想像され、」

(3)「上床は平安後半（A.D.993 ～ 1192）の遺物と想像されます。大体において二世紀ぐらいの開きがあると考えております」[1)]

と述べている。オホーツク式土器の変遷については、すでに砂層～黒土層に及ぶ墳墓の発見によって、「層位的編年の基礎が確立された」、と指摘され（名取 1948b：313）ていた。また、中間の貝層の堆積状況については、「2 層乃至 3 層若しくはそれ以上になっていることがある」、と観察されていた（児玉 1948：12・13、72）。これらの点に留意すると、新旧の 10 号竪穴から出土した多様な土器群は次のように編年されることになる。

(1) 砂層の刻紋土器に略対比される、「下床」の土器（炉体）：8 世紀初頭～ 8 世紀終末頃

(2) 貝層・黒土層に対比される、「上床」の土器群（佐藤・駒井 1964）：10 世紀終末～ 12 世紀終末頃

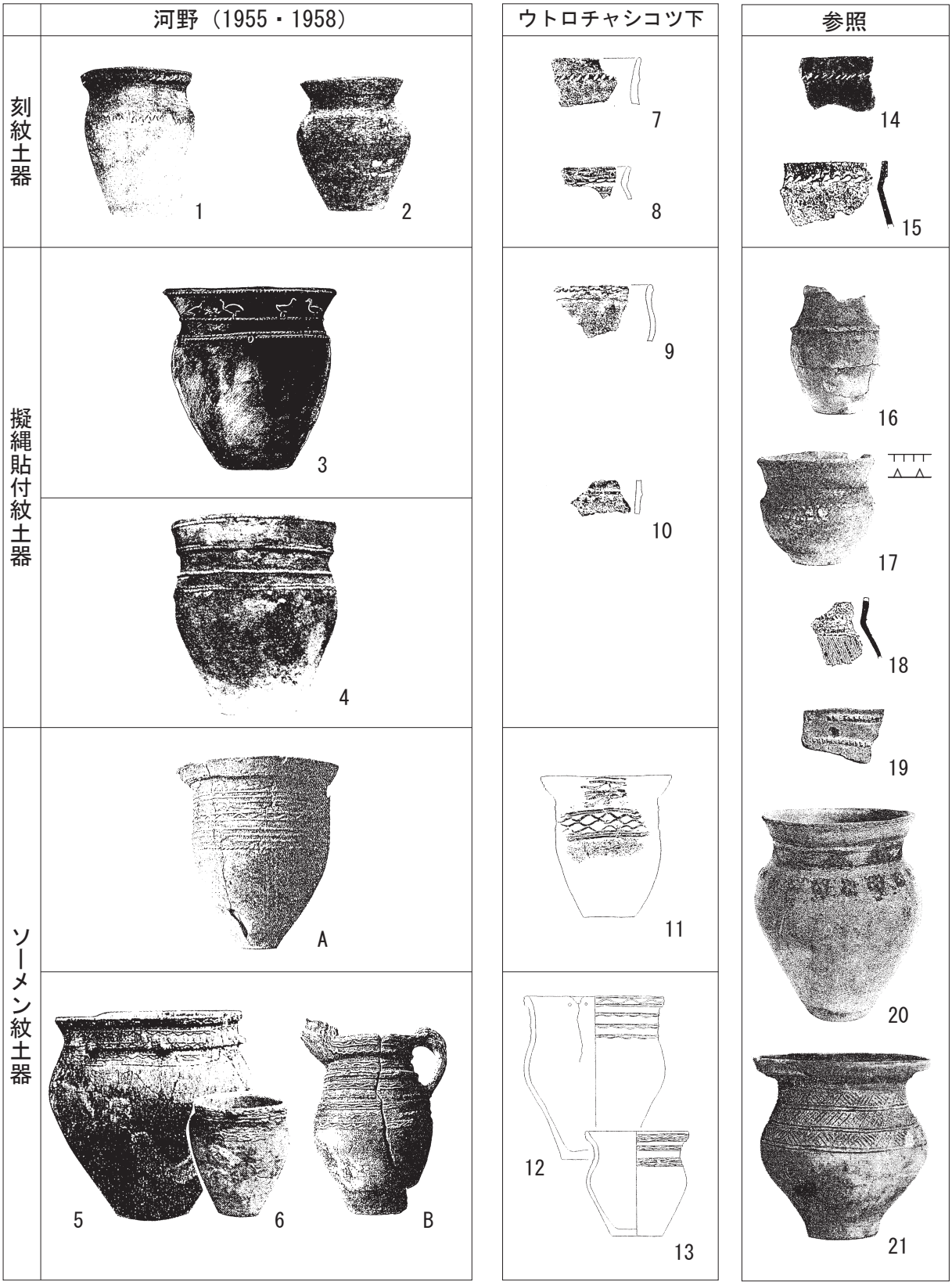
つまりオホーツク文化と擦文文化は、モヨロ貝塚の周辺域において「ある期間」、すなわち 8 世紀～ 12 世紀まで穏やかに併存し（「棲み分け」）、双方の民族（住民）は接触を通じて、「文化要素、経済交流」を行っていた。河野はそのように、モヨロ貝塚の新成果をもとに推論していたと考えられる。

ではこの仮説は、どのような土器編年に基づいて組み立てられたのであろうか。

2）河野の新しいオホーツク式編年案〔第 1 図〕

『斜里町史』（第 1 編：先史時代史）（河野 1955）において、河野はオホーツク式を 4 細分した紋様要素の「型」別編年案を初めて公表した。A･B、D 型（5･6）型の標本例を示して各型の説明を行い、その年代的な序列と貼付紋の変遷傾向について細かく論じている。続いて、『網走市史』の先史時代・原史時代篇を執筆し、新たに未提示であった C 型の標本例 2 点（2・3）を追加した。D 型（ソーメン状貼付紋：5）の変遷に関しては、トコロチャシコツ下遺跡 1 号竪穴の層序をふまえて、通説では「忘失」または「無視」されている、トビニタイ土器群Ⅱとソーメン紋土器の編年に係る重要な所見を明らかにした（河野 1958：120-123、柳澤 1999b ほか）。

それでは標本例を参照し、両書の編年構想の成り立ちを改めて観察してみよう。河野の観察による



第１図　河野広道のオホーツク式土器編年案の成り立ち

と、北海道出土のオホーツク式は大きく四つの「型」に区別されるという（河野 1955）。そして網走出土のものについては、以下のように分類するのが便利であると指摘した（河野 1955・1958）。

(1) A 型土器（1）型紋（文）土器：様々な型紋（スタンプ紋）を有するもの

(2) B 型土器（2）刻紋（文）土器：舟窩状刻紋や断続、交叉する沈線紋、突き点紋を配するもの

(3) C 型土器（3・4）擬縄貼付紋（文）土器：縄の形を模倣した紐状の貼付紋を有するもの

(4) D 型土器（5・6）ソーメン状貼付紋（文）土器：革紐状又はソーメン状の細い粘土紐を付した型式

以上の標本例のうち、5・6 例のみが 1955 年に提示されたものである。1958 年では、D 型 5・6 例に相当する標本例は省かれている。各型の説明で特に注目されるのは、貼付紋の変遷に係わる細かな観察と記述である（( )・下線：筆者の挿入）。

(1) 擬縄貼付紋は、「出現の初期には太く、年代の下ると共に細くなって次の D 型（5・6）に移行してゆく。」（河野 1955）

(2) 擬縄貼付紋、「出現の初期には比較的太いが、年代の下るに従って太さを減ずる」（河野 1958）

1958 年の記述によると、擬縄貼付紋には、(a) 縄を垂下したもの、(b) 結び目状のもの、(c) 肩部を一周するものなどが挙げられている。また時には、瘤状の突起をその間に配する場合もあるという。したがって太い擬縄貼付紋ものとは、いわゆる「貼付式浮紋」に相当し、肩部を一周するものが細いタイプを指していると理解できる。概ね筆者の分類によれば、前者が刻紋土器 A に、そして後者が刻紋土器 B（＝擦紋Ⅲ）、及びそれ以降（＝擦紋Ⅳ）に伴うものとなる（柳澤 2007a：36-57）。例示された標本例は後者に属する。(1) の記述によれば「3 例→ 4 例」という流れで 5・6 例のソーメン紋土器 3（柳澤 2008a）へ移行することになる。

ついでソーメン状貼付紋については、つぎのような記述が見える（下線・(　) ゴチック：筆者）。

(1) **革紐状のもの**が**ソーメン状のもの**（5・6）よりも古い型式である（1955）。

(2) ウトロチャシコツ下竪穴住居址では、「第 3 層から**D 型の革紐状のもの**を、第 2 層から**D 型のソーメン状のもの**（5・6）を出土している（1955）。

(3) ソーメン状貼付紋は、「擬縄文から変化したが、**初期には革紐状を呈する**ものがある。**後期のものは断面が円くなっている。**平光吾一（1929 年 12 月）はこの型に属する国後（ポンキナシリ遺跡）出土の海馬注口土器（B）をもって縄文土器の一型式とみなし、アイヌ人の作であるとしている」。

初期の「革紐状」を呈する貼付紋とは、断面が平坦なものを指すのであろう。参照された国後島ポンキナシリ遺跡の資料（平光：前出、山内 1939）には、「古い型式」に属し、革紐状の平坦な断面をもつ貼付紋を施した複数の完形品（A）と断面が円い後期の貼付紋で飾られた海馬注口土器（B）などの二者が存在する。つまり（1）～（3）の記述によれば、河野は擬縄貼付紋を持つ土器群に対して、太い貼付式浮文から細い擬縄貼付紋への変遷を認める。さらにソーメン状の貼付文については、革紐状で断面の平坦なトビニタイ土器群Ⅱから、断面が円いソーメン状の貼付紋への変遷を想定している、と考えられる。

そこで改めて注目されるのは、モヨロ貝塚では「下層からは A、B 両型が出土し、その上に C 型が、さらにその上層に D 型がある」、という河野の指摘である（河野 1958）。これは、調査後に自ら土器類の変化と層序の関係を調べていることを意味するものと思われる。貝層土器の層位的な変化については、すでに児玉が、「場所によって 2 層乃至 3 層若しくはそれ以上になっていることがある」、と指

摘していた（児玉 1948：12・72）。また、東大の報告（駒井編 1964）を参照すると、「貝層」は刻文と貼付文が相半ばしている、とも指摘されている[2]（名取・大場 1964：52）。

したがって、これらの観察をも踏まえると、「貝層」の土器群について河野は、

(1) 太い浮紋を持つ刻紋土器（16）

(2) 細い擬縄貼付紋を持つ、刻紋土器の新しいもの（17）

(3) 刻紋を消失した、擬縄貼付紋土器のやや新しいもの（18）

という順序で変遷し、それに肥厚した幅広の口縁部を持つ、擬縄貼付紋土器の新しいもの（4）が接続し、その後ソーメン紋土器1・2、3（5・6）へ移行すると想定したと考えられるのである。先の標本例も加えると、太い擬縄貼付紋からの変遷は、「16→17→3→18→4」の序列で捉えたことになろう。さらに注意されるのは、ウトロチャシコツ下遺跡の1号竪穴の層序が、『斜里町史』・『網走市史』の双方で、きわめて重視して取り上げられていることである（〔第1表：1955〕、柳澤 1999b）。

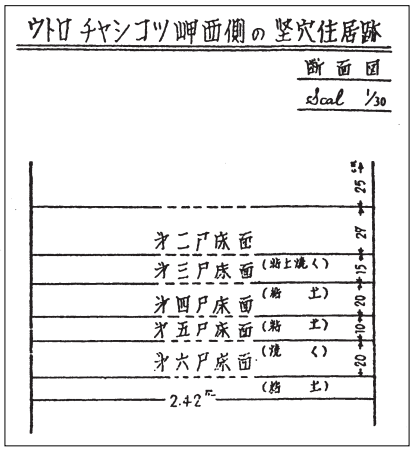
出土土器と層序の関係については、

(1) 第4・5層　：舟窩状刻紋・爪形文

(2) 第3層　　：同上、擬縄貼付紋・ソーメン状貼付文

(3) 第2層　　：変化に富んだソーメン状貼付文

と記載されている。



第1表　ウトロチャシコツ下の層序

先にもポンキナシリ遺跡の資料（A）を引用して述べたとおり、D型土器の説明の項では、

(1) 5・6層：A・B型

(2) 4層　　：B・C型

(3) 3層　　：D型の革紐状のもの

(4) 2層　　：D型のソーメン状のもの

として、「3層（トビニタイ土器群Ⅱ）→2層（ソーメン紋土器3）」の層位的な出土状態が指摘されている。この観察の正しさは、後に宇田川洋氏が公表した資料（宇田川編 1981）よって、以下のように裏付けられた。

(1) A・B型：7・8

(2) C型：9・10

(3) D型（革紐状のもの：11）

(4) D型（断面の円いソーメン状のもの：12・13）

以上のとおり、河野の新しいオホーツク式編年案の成り立ちを理解すると、トビニタイ土器群Ⅱは「オホーツク式土器」の範疇で捉えられていることが分かる。この点でも河野の1955・1958年編年案は、通説編年のまさにルーツをなしていると認められよう。

さて、この新編年案をもとに河野は、元の樺太侵略（A.D.1297～1308）の時点まで、道北のオホーツク文化は勢力を保持していたと想定している。平安時代までの想定から百年余り終焉の年代を延長した訳だが、この点についても、特にウトロチャシコツ下遺跡の層序が参照されている（( ) 挿入：筆者）。

「第6層（刻紋土器）はオホーツク文化の初期、第2層（ソーメン紋土器）は末期」であり、その文化層の上に「第1層の江戸時代初期頃の文化層が存在することから、オホーツク文化の終末期は鎌倉・室町期頃（A.D.1192～1333・1404～1573）であることが推定される。」

この記述では、元の樺太侵略の年代とウトロチャシコツ下遺跡の1・2層の層序が結び付けられている。江戸初期直下の文化層を室町・鎌倉期のものと見做す証拠は、いったい何処に存在するのであろ

うか。またそれに関連して、オホーツク文化の終焉を平安時代に求める根拠とした大陸系の渡来文物を、河野はどのような理由から棚上げするに至ったのであろうか。

元の侵略によるオホーツク文化の終焉説には、このように先の論考や座談会発言と比べると、明らかに矛盾や論理の飛躍が認められる。これは物証と論証に乏しい、一種の想像的な仮説になっていると言えよう。

3）オホーツク式・擦文式土器人の「棲み分け」論の実態

河野の新北方編年案は、以上の分析によると層位的な事実に基づいて、「トビニタイ土器群Ⅱ（A・11）→ソーメン紋土器（B・5・6）」の序列を想定していたと考えられる。また元の侵略（A.D.1297～1308）に伴って、オホーツク式土器は「鎌倉期」もしくは「距ること遠からざる頃」に終焉を迎え、擦文式土器に「吸収」された、とも推察されている。したがってソーメン紋土器と擦文土器は、少なくとも鎌倉期（1192～1333）まで併存していたと想定していると認められる。その具体的な状況について、河野は次のように説明している（河野 1955：7-9、下線：筆者）。

(1) 擦紋式土器人は主として河川と山を生産圏とする民族である。その遺跡は海岸にも存在するが、河川を遡ってかなり奥地にまで及ぶ。

(2) オホーツク人は海岸を舞台とする漁狩猟に長じた、大陸の北方から新しく移住して来た、新来の侵入者（民族）であったと考えられる。その遺跡は海岸のみに限定されている。

(3) 斜里地区では、両者の遺跡は「<u>互いにモザイク状に交互に入り交じって散在していて、両者の部落がある期間互いに隣接して存在していたことを示している。</u>」

これは研究史上に周知された、オホーツク人（文化）と擦文人（文化）の「棲み分け」論である。一読すると、両者が接触を通じて「文化要素、経済交流」を行っていたと想定した物的な証拠の記述が消えていることに気付く。河野はこの「棲み分け」状態について、金石併用後半期に見える「対立時代」であると節の見出しで表現している。果たして、「文化要素」の交流が行われたとする物的な証拠（稀に「混入」する異系統土器）は、その有効性を俄に消失したのであろうか。そこで河野の貼付紋分析を参照しながら、新しいオホーツク式土器の編年案を改めて検討したい〔第1図〕。

(1) C型 太い擬縄貼付紋を持つもの：刻紋土器（16）

(2) C型 細い擬縄貼付紋を持つもの：擬縄貼付紋土器（17）

(3) C型 細い擬縄貼付紋を持ち、口縁部の刻紋を欠くもの：擬縄貼付紋土器（3・4・9・10・18）

(4) D型「革紐状」のソーメン状貼付紋を持つもの（A ≒ 11）：ソーメン状貼付紋土器

(5) D型「断面の円い」ソーメン状貼付紋を持つもの：ソーメン状貼付紋土器（B ≒ 5·6 ≒ 12・13）

河野の考え方では、(1) 期から鎌倉期に比定される (5) 期まで、オホーツク式と擦文土器は併存する。仮に各時期に接触があったとすれば、何らかの痕跡が土器それ自体や出土状況に残されているであろう。その点で特に注意されるのは、南千島に見られる擬縄貼付紋と擦紋系の要素を併せ持つ土器の存在である。国後島別飛遺跡の19例や南千島の20例が代表的である。どちらも戦前から広く周知されていた資料である。これらのキメラ（折衷）土器は、擦紋末期におけるオホーツク式との併行関係を端的に示唆する資料と認められる（柳澤 2000・2006b：92 − 101）。

それに加えて、『斜里町史』に掲載された複段斜格子紋（石附 1969）を持つ21例の壺形土器が注意される。胴部の文様は擦紋系であるが、胴径の大きい器形はオホーツク式に由来するものと思われる。これも擦紋・オホーツク式の併行関係を示唆する、有力な物証の一つと評価されたであろう。こ

の土器について、河野は特に言及していないが、併存時代の土器に見える折衷的な現象に留意しつつ、標本例として特に選択していると推察される。

以上のように1955～1958年当時、河野が参照したと推定される資料や、新たに例示されたものを統合的に整理すると、異系統土器の貫入や接触によって作られた、網走・斜里や南千島のキメラ（折衷）土器によって、河野は（3）～（5）期における擦文・オホーツク文化の併存状況（並行関係）を想定していたと考えられよう。「併存」する状態を「対立時代」とも表現しているが、それによってキメラ（折衷）土器や貫入した異系統土器の意義が失効する訳ではなかろう。事実、それらの意義を否定的に扱った記述は、『網走市史』と『斜里町史』の中にはどこにも見当たらない。

したがって河野は、「対立時代」と表記しながらも、場合によって、又はある期間は、1949年の発言と変わりなく、「文化要素、経済交流」が相互に緩やかに行われていた、と考えていたのではなかろうか。この推論を確認するための直接的な手掛かりは発表されていない。しかし、河野が例示した第1図の標本例や参照資料からは、そのように解釈するのが最も合理的であると言えよう。現在に至るまでの通説編年では、この図に示した参照資料について、どのような評価を与えているであろうか。

さて、「トビニタイ土器群Ⅱ→ソーメン紋土器」という、オホーツク式土器の変遷序列を認め、それらと擦文土器との併存状態、オホーツク文化の室町時代への残存を想定した河野の新編年観は、その後、東京大学によるオホーツク海沿岸・知床半島における組織的な調査の実施と、その研究成果の発表によって（駒井編1964）、意外な局面に遭遇することとなる。いわゆる「東大編年」（大井1970）の一般化と、河野のオホーツク式新編年の「忘失」という流れである（柳澤1999b：51-55）。「東大編年」の成り立ちと疑問点については、すでに別稿において再検討を試みている。詳細はそれに譲りたい[3)]。

2. ポスト「東大編年」における北方編年説の対立

接触と交流を想定しつつ、擦紋・オホーツク人の「棲み分け」と「対立」を想定した河野の新編年案〔**第1図**〕の発表後、道東部の編年研究はどのように展開されたであろうか。その歩みを簡略にたどってみよう。

Ⅰ期　山内（1933）　『日本遠古之文化』において、「沈紋の多い式」→「浮紋の多い式」の序列を提示する。

後藤（1934）　「オホーツク文化は擦文文化の消滅後200年間存続した。」

Ⅱ期　河野（1935）　「擦文は北海道アイヌである。オホーツクは樺太アイヌである。<u>そのオホーツク文化の末期文化と擦文は共存するが混和しない。</u>」

山内（1939）　編年序列は1933年論文を踏襲し、オホーツク式の分布観を訂正し、標本例を差替える。

Ⅲ期　河野（1955）・（1958）

オホーツク式の新編年案を提示。擦文人とオホーツク人はモザイク状に棲み分け、「対立的」に併存する。オホーツク人（文化）は鎌倉時代ないし、その遠からざる時期に衰退し、擦文人（文化）に吸収される。

駒井編（1964）いわゆる東大編年（大井1972b）の提唱。擦文文化の年代を8～9世紀から室町時代（A.D.1336～1573）までと想定し、<u>オホーツク文化の終末は擦文文化よりも早く、11世紀代と捉える。</u>

	山内（1964）	11～12世紀まで中国（大陸）の遺品を持つことから、河野説を間接的に否定し、オホーツク文化（ソーメン紋土器）の方が遅くまで存続すると主張。「擦文文化→（狭義の）オホーツク文化」の序列は不動。
Ⅳ期	藤本	（1965）「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』6
	藤本	（1966）「オホーツク土器について」『考古学雑誌』51-4
	石附	（1969）「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」『北海道考古学』5
	大井	（1970）「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』4
	宇田川ほか	（1971）『弟子屈町下鐺別遺跡発掘報告』
	佐藤	（1972）「擦紋土器の変遷について」『常呂』
	菊池	（1972a）「トビニタイ土器群について」『常呂』
		（1972b）「11号・12号およびその発掘に伴って発見された遺構群について」『常呂』
	藤本	（1972a）「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』
	藤本	（1972b）「調査の経過と問題点の摘出」『常呂』

いわゆる「東大編年」と山内博士の新北方編年説が1964年に発表された直後から、新世代による研究成果が一斉に登場し、戦後の北方考古学界は新しいステージを迎える。擦文・オホーツク文化の接触・融合現象については、最初に問題を提起した石附喜美男氏（石附1969）と、「トビニタイ土器群」を仮設して議論の深化を図った、菊池徹夫氏の研究（菊池1972a・b）が注目される。

1）石附喜三男の「融合形式」編年論（1969）

石附喜三男は新旧の河野学説をふまえて、「明確な共伴例」と「両者の特色を同一個体中に併せ有する若干例」を用いて、「融合・接触」現象を編年的に捉える立場を初めて明確に打ち出した（石附1969）。

河野が戦後に発表した論考（河野1955・1958）は、今日なお学問的生命を保っており、学史を学ぶ際の重要な道標となっている。それによると、オホーツク・擦文式の両文化は時期的に併行しており、斜里地区では、両者が経済基盤を異にして共存し、棲み分けていたが、やがてオホーツク人は擦文式文化人に吸収されていった、と説明されている。石附はこのような河野説を、「大方は認めてよい」として高く評価する。

他方では、金属器の系統観や大陸との直接的な通交関係の想定に関して、率直に疑問を投げ掛けている。特にオオーツク文化が消滅した直接の原因を、「樺太への元勢力の進入」に求める仮説に対しては、「かなりの疑問を感じる」と批判している。これに対して擦文式土器の消滅の後、「オホーツク式土器」の存続を説く山内説（山内1933・1939、1964）に対しては、「今日では認めることができない」と全面的に否定し、河野説並びに東大編年（駒井編1964）を支持する姿勢を明確に表明している。

河野説では、擦文・オホーツク式の棲み分け的な「併存」ないし「対立」を説いたが、そうした現象を編年学的に解明する作業は、今なお十分に行われていない。そのやや漠然と想定された社会状況は、石附によると「オホーツク式、擦文式両土器の「確実な共伴例」と、両土器の特徴を併せ持つ「融合形式」を拠り所として、明確に把握できるという。

提示された標本例によると、ここに言う「融合形式」は、後に菊池氏が提案した「トビニタイ土器群」のⅠ・Ⅱ類及び中間的なもの（菊池1972a）にほぼ相当する。また、それらを出土した遺跡11件の内訳は、

(a)「擦文・オホーツク共伴」が2例、(b)「擦文・融合形式共伴」が6例、(c)「融合形式」が3例ととして示されている[4)]。それでは、実際に論文中で引用され、又は言及された資料を用いて、河野説の具体化と刷新を試みた石附の編年案を検討してみよう。〔**第2図**〕。

まず要点を摘要すると（( )・下線の挿入：筆者)、

(1) オホーツク式土器と擦文式土器の「接触」は、「横走綾杉文・小格子目文・各種小文様帯による文様帯複段文」(3～5) 等の文様が盛行した「編年上の一時期」であったと、考えられる。主体的に出土する竪穴住居址（以下「竪穴」と略す）としては、豊富遺跡（天塩町)・豊里B（女満別町)・和天別河口遺跡（白糠町)・開生遺跡（雄武町）などが挙げられる。

(2) これに対して、「編年的にもう一段古い時期には、横走平行線上へと重複施文された文様手法が一般的なものであった」、と考えられる。その実例としては、元町遺跡（竪穴)（女満別町：1）や神居場古譚遺跡199号竪穴（旭川市）がある。

(3) 両式の「接触」は、この「一段古い時期」の「おそらくは末期から」から「横走綾杉文、小格子目文、文様帯複段文様が盛行する時期にかけて」行われた。しかし「おそらくは後者の時期（3～5）を主として」接触が行われ、「融合形式（13～18、7・19~21）が生じたように思われる。」

(4) その時期のオホーツク式土器は、「貼付式浮文」、すなわち「藤本分類のe群（藤本1966：22～26）の文様が盛行」した「末期形式」の時期に相当する。「このことは取りも直さず、擦文式、オホーツク両文化人の接触が密になったことを示すものであろう。」

(5) 擦文式土器において「編年上最も新しく位置されるものは連続鋸歯文を原則として一段しか施文しないものである。」その実例としては、西月ヶ丘遺跡（根室市）7号竪穴（8・9）や青苗貝塚（奥尻島）の出土資料が挙げられる。擦文式・オホーツク式の接触は（4）の時期なので、「擦文式土器の方が1形式後まで残存するとみて間違いなさそうである。藤本e群土器と擦文式の「共伴関係あるいは融合形式といった資料は、現在のところまったくみられない。」「故に私は、オホーツク文化人が擦文式文化人に吸収されたとする、河野広道博士の見解に賛意を表する」、

となる。

さらに、幾つかの注目すべき論点が補足されている。

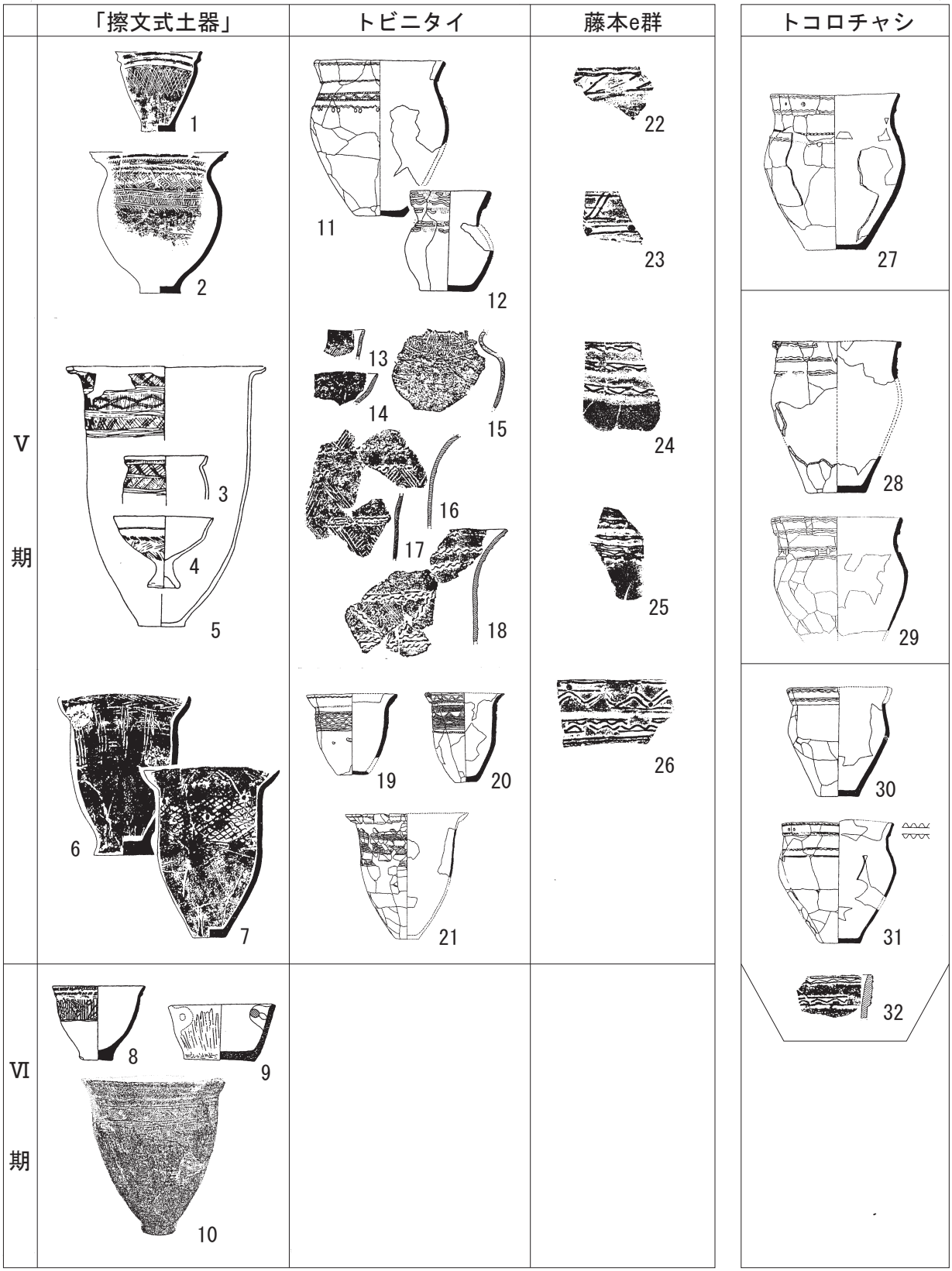
(1) 藤本編年では、「融合形式が編年的にe群の次に位置する」と考えられている。しかし、(a) 藤本e群（22～26)）と「融合形式」(16～18・19～21）の貼付浮文は基本的に「まったく共通」である、(b) それらの「共伴関係」は、横走綾杉文・小格子目文・文様帯複段文様が盛行する時期に主としてみられる、ので、両者は「同一時期のもの」と考えられる。

(2) それは、(c)「伝統的純オホーツク文化人の所産」、d)「擦文式文化の影響を強く蒙り、あるいは密な交渉を有していたオホーツク式文化人の所産と推察」される。

(3) トビニタイ遺跡の1号（11・12）→2号（13～18・19～21）という「重複前後関係は、オホーツク式土器の最終形式の行われた時間幅（27→28・29・32≒ 30・31）の中にすっぽり吸収されてしまう前後関係と考えられる。」

(4) また、オホーツク式土器の分布圏は、藤本d群（11・12・27）の時期からすでに「北海道東部・南千島に主として限られるようであり、樺太とは異なった文化圏を形成していたと考えるのが妥当であろう。」したがって、「オホーツク文化消滅の直接的な原因を」「元の樺太侵入」に求めるのは「無理があるように思われる。」

(5) その最大の原因は、「文化的に優位にあった擦文式文化人との直接的な接触および抗争」で



第２図　石附喜三男の接触編年説と参照資料

あったと考えられ、「その時期は12世紀代から13世紀の初頭の頃ということになる。」「オホーツク文化の消滅も12世紀代の前半に求められることになろう。」

以上が石附の主張するところの、河野説を敷衍した新説編年案の大要である。果たして、擦文式とオホーツク式の「接触」と「融合」は以上の記述で十分に解明されたと言えるであろうか。編年論としては、ごく大まかに構成されており、その論証は不十分に思える。次に疑問点を列挙してみよう。

(1)「融合形式」と藤本e群の貼付浮文を持つ土器は、それぞれトビニタイ土器群Ⅰ（16～18)、Ⅱ（7・19～21)、ソーメン紋土器（27～32）に対比される。それらの貼付浮文の特徴は、誰の目にも明確に異なるものと認識される。したがって同時期における、「接触･融合･吸収」の事実を証明するメルクマールとはなり得ない。

(2)「融合形式」のうちのトビニタイ土器群Ⅰの胴部文様は一般に1段構成をとる。鋸歯文を持つ16～18例はそれに属する。これらが、仮に「擦文式文化の影響を強く蒙り、あるいは密な交渉を有していたオホーツク式文化人の所産」であるならば、複段文様が盛行する時期に未来の1段鋸歯文が、ほんとうに成立したのかどうか、その型式学上の根拠が問われよう。

(3) さらに複段文様を持つ3～5例と、ソーメン紋を持つ27～32例が同時代に「接触」すると、トビニタイ土器群Ⅰ（16～18）とトビニタイ土器群Ⅱ（19～21)、という異相の土器群が同時に成立し、日常的に併用されたと果たして想定できるのか。この点に関しても、型式学的に十分な論証と説明が求められよう。

(4) 佐藤達夫の擦紋土器編年では、「Ⅴ期」とされた資料は、擦紋Ⅲ6（7)、擦紋Ⅳ8（3～5)、擦紋Ⅴ（16～18）に比定されている。石附の編年案によれば、それらは「6例→3～5例≒16～18例」と変遷し、藤本e群（22～26）と同時代に存在したと捉えられる。しかし、そのような編年観を証明する出土事例や層位的な事実は、1969年以前にも、その後においても、一度も報告された事はない。

(5) ちなみに、トビニタイ土器群Ⅱ（第1図11）とソーメン紋土器（同図5・6・12・13）の序列は、河野が懇切に説明し記載したとおり、1949年のウトロチャシコツ下遺跡の竪穴調査において、明白な層位事実を以て明らかにされている。佐藤編年の擦紋Ⅳ・Ⅴなどは全く出土していない。つまりトビニタイ遺跡の1･2号竪穴の床面土器群とは、歴然とした「地点差」（山内1937）が容易に読み取れる。この遺跡については、東大編年（駒井編1964）では取り上げられているが、石附編年では全く言及されていない。ウトロチャシコツ下遺跡における、「「革紐状」貼付紋（トビニタイ土器群Ⅱ：A）→「断面の円い」ソーメン状貼付紋（B)」という層位的な出土事実を、おそらく石附は誤読したか、又は見落としたのであろう[5]（河野1955：20-23、1958：122-123)。

(6) 試みに石附編年（第2図）の中にウトロチャシコツ下竪穴の資料を挿入してみよう。すると、石附Ⅴ期の「融合形式」編年の構想は、根本からの再検討を要することが了解されるであろう。

さて、オホーツク文化衰退の最大の原因は、「文化的に優位にあった擦文式文化人との直接的な接触および抗争」であったと考えられ、「オホーツク文化の消滅も12世紀代の前半に求められることになろう」、とされている。したがってこの年代観は河野の場合と同様に、遼時代の素焼土器をはじめ、大陸伝来の「11･12世紀の遺品」（山内1969）が根拠とされていると推察されよう。

以上に観察したとおり、石附の「融合形式」編年論には、(1)～(6)に至る様々な疑問点が認められた。そうした疑問点は、その後今日に至るまでの間に、どれほど克服されたであろうか[6]。

2）菊池徹夫氏の「トビニタイ土器群」編年論

菊池徹夫氏は石附の編年案（石附 1969）に疑問を抱き、「融合形式」された土器群を「トビニタイ土器群」として捉え直し、その細分に基づいて石附とは異なる編年体系を『常呂』誌上に発表した（菊池 1972a：447-461）。

氏の編年案は、まず擦文土器編年（A～E）を基礎とし（菊池 1970）、それに藤本強の「オホーツク土器」編年（a～e 群：藤本 1966）を対比して、石附の「融合形式」を一系統をなす「トビニタイ土器群」と捉える。そしてこれら三者の関係性を、竪穴の重複事例や層位的な事実、型式学的な分析を総合的に考慮して編年体系を整えている。その論証は簡潔、明瞭になされているが、旧稿でも述べたように種々の疑問点が隠れているように思われる（柳澤 2008a：2-11）。標本例を挿入して編年案の大要を示すと、次のようになる〔**第 3 図**〕。

トビニタイ土器群Ⅰ（1～9）　＝ 藤本 d 群（17～19）＝ 擦文 C（24～26）～ D（27～28）
トビニタイ土器群Ⅱ（10～16）＝ 藤本 e 群（20～23）＝ 擦文 D（27・28）～ E（29・30 ＝ 31）

一瞥するだけで、石附編年との大きな相違点に気付くであろう。まず擦文土器では、横走綾杉文や小格子目文、文様帯複段文を持つ土器群を D 類とする。そして、それより古いものを C 類、新しいものを E 類として区別した点が挙げられる。これは、やや漠然としていた石附編年を、より明確な序列に再編成したものと思われる。そこで両者を比べると、C･D 類は「Ⅴ期」に、また E 類は「Ⅵ期」に対応する。石附編年では、「「Ⅴ期」＝「融合形式」（トビニタイ土器群）・藤本 e 群」、と捉えられていた。これに対して菊池氏の新編年案では、「トビニタイ土器群」を 2 細分し、新たに藤本 d 群を加えている。また、「融合形式」と藤本 e 群が消滅した後には、終末期として F 類土器（菊池 1970）の存在を想定し得るとも述べている。

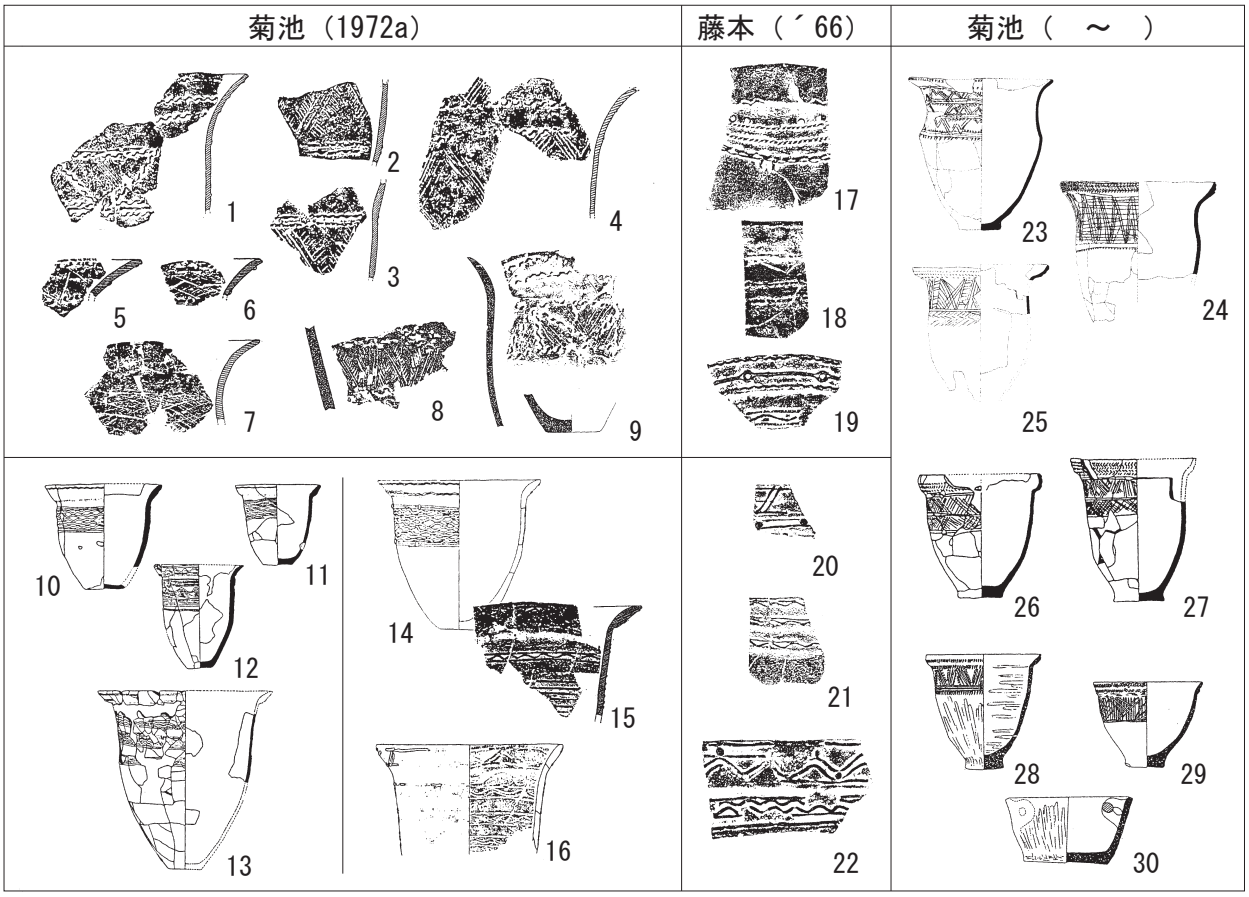
そしてこの後、擦文式土器は「本州および道南地方からの多量の文物の摂取によっておおきく変質をとげる」とし、その年代を「鎌倉時代」、すなわち「13 世紀を前後する頃」と推定している。オホーツク式土器の終焉年代については特に言及していないが、平安時代の内に、おそらく 12 世紀代に求めているのであろう。そのとおりであれば、この年代の根拠としては石附の場合と同じく、「遼時代の素焼土器」や金属製品などの、大陸伝来の文物が利用されていると推測される。

以上のように菊池氏の編年案は、石附編年とは根本的に異なる構造を有している。特に編年案の中核をなす「トビニタイ土器群」の分析は、先行研究を広く見渡して丹念に行われている点が注意される。たとえば大場利夫の「融合型式」（大場･児玉 1956）を嚆矢として、東大編年の「第 1 類土器」（駒井編 1964）、藤本強の「オホーツク土器に含めるには若干の疑問のある土器群」（藤本 1966）、石附喜美男の「融合形式」（石附 1969）、大井晴男の「接触様式」（大井 1970・1972b）などが挙げられる。

氏はそれらを参考にしつつ、問題とされた土器群を細かく吟味した結果、(a) 形態上の特徴からみて、いくつかに分類し得る、(b) そうした差異は、「主として時間的な差」に結びつくのではないかという仮説を立て、様々に呼ばれてきた「融合形式」を次のように分類した〔**第 4 図**〕。

(1) 刻文・擬縄貼付文をもつもの（4～6）
(2) 刻線文を欠き、紐状貼付文による種々の文様構成を特徴とする土器群（7～9・27～29・31）
(3) (1)・(2) とはやや趣を異にする土器群（30 ほか）

これら三群の土器については、標本例を示して詳細に観察と比較を行い、細分案の妥当性を明らかにしている。(1) 類を「トビニタイ土器群Ⅰ」、(2) 類を「トビニタイ土器群Ⅱ」と呼称し、(3) 類を両者の「中間的な土器群」として定義した。ただし (3) 類の設定は暫定的であって、資料の増加を俟つより致し方ないと述べている。



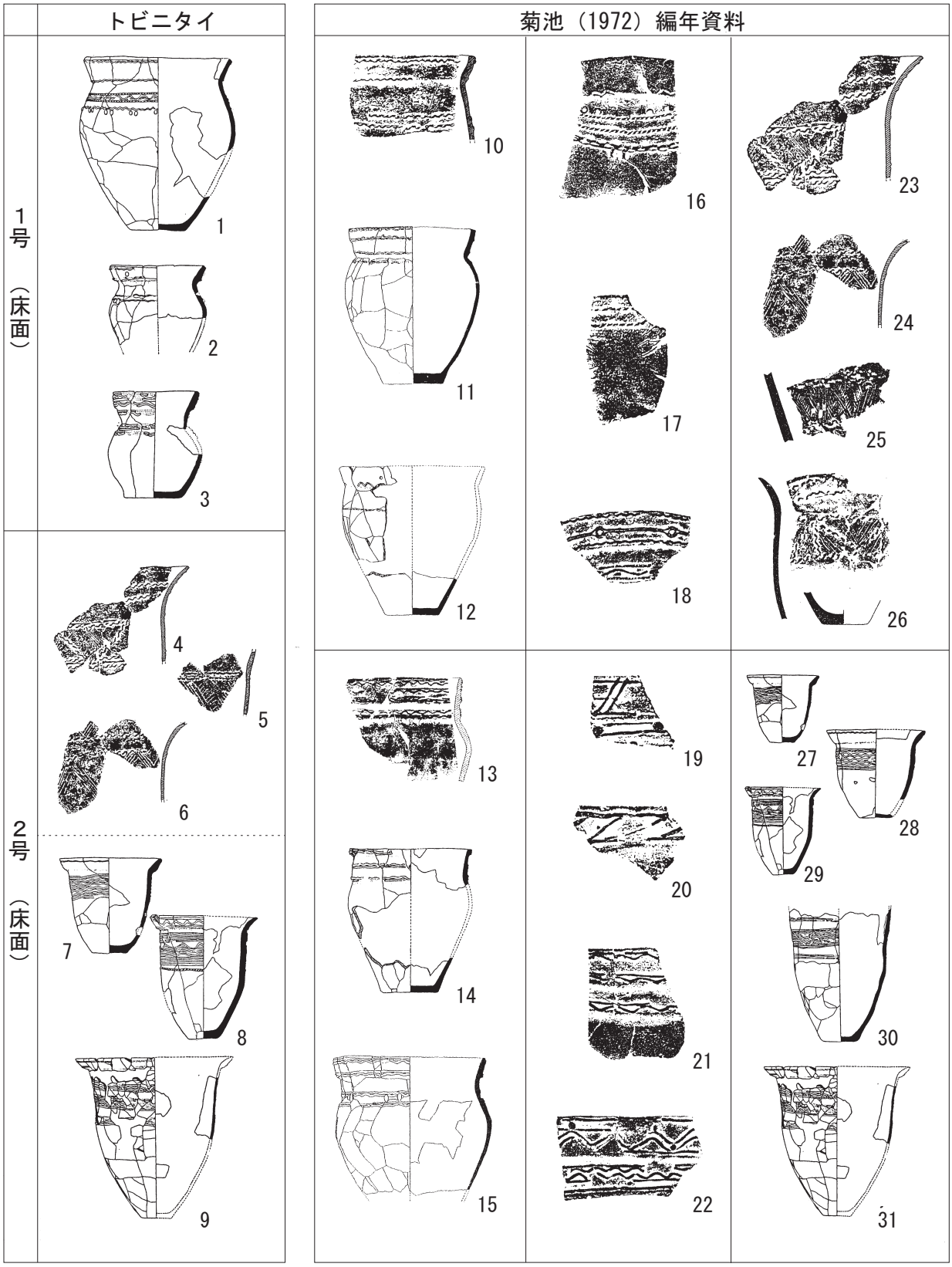
第３図　菊池徹夫氏の擦文・オホーツク式土器の接触編年論

このように「融合形式」を「トビニタイ土器群Ⅰ・Ⅱ」に細分し、明確に年代差を想定した結果、オホーツク式と擦文式の対比においては、石附と異なる秩序をどのように確立するか、その点が編年作業の要となった。

その作業に先立ち、更なるトビニタイ土器群の細分の可能性に触れる。そして、トビニタイ遺跡２号竪穴やオタフク岩遺跡３・４号竪穴の「伴出状況」などから見て、「トビニタイ土器群Ⅱ」は「ひとつの型式」として纏まりを示していると認め、「地点差」と「型式差」（山内 1937）をもとに、新しい編年秩序を論証している点が注目される。このような視点は、石附とは明らかに異なるものと言えよう。

次に、「オホーツク式土器」との対比を取り上げ、藤本ａ～ｅ群とはどのような関係にあるのか、という設問を立てる。その有力な「手がかり」として、文様と口縁部文様帯の特徴に注目し、「トビニタイ土器群Ⅰ・Ⅱ」に見える差異は、藤本ｄ・ｅ群の間にも認められると述べる。そしてその序列の妥当性は、重複したトコロチャシ遺跡１号竪穴の床面土器群の差異として、明確に捉えられるとする。この想定はまた、トビニタイ遺跡における「１号→２号」竪穴の「層位関係」からも傍証される。したがって「トビニタイ土器群Ⅰ」は藤本ｄ群に、そして「トビニタイ土器群Ⅱ」は藤本ｅ群に、それぞれ併行するであろう、という編年を導いている。

他方、擦文式土器との併行関係については、器形や断面の形態的な特徴の相関性を指摘し、新旧の伴出事実も、「いわば状況証拠にはなしうる」として、石附の斜格子文や文様帯複段文をめぐる編年



第４図　トビニタイ遺跡竪穴の序列と菊池編年案の対比

観に近い見方を提示する。特に、弟子屈町下別遺跡（宇田川ほか 1971）で検出された重複竪穴の事例（「擦文式土器Ｂないし C」→「トビニタイ土器群Ⅱ」）を重視して、「トビニタイ土器群Ⅰ＝擦文式土器Ｃの一部ないし D」、「トビニタイ土器群Ⅱ＝擦文式土器Ｄないし E の一部」、という対比案を提示している。それでは以上の点をふまえて石附編年の矛盾点の解決を試みた菊池編年の内容を具体的に検討してみよう[7]〔**第 4 図**〕。

まずオホーツク式では、トビニタイ・トコロチャシ遺跡における層位事実を利用して、「藤本 d 群（1・2）→トビニタイ土器群Ⅰ（4 ～ 6）・トビニタイ土器群Ⅱ（7 ～ 9）」、という序列を導く。さらに型式学的な観察と伴出状況から、トビニタイ土器群の床面上での混在を想定し、「Ⅰ→Ⅱ」への変遷を想定する（柳澤 1999a：89）。この場合、トビニタイ土器群Ⅰ・Ⅱを混在と見做すのは良いとして、次の点が問題となろう。

（1）ウトロチャシコツ下竪穴で確認された、「トビニタイ土器群Ⅱ（≒ 7）→ソーメン紋土器（≒ 14・15）」の層位事実を、どのように捉えるのか。

（2）また（1）とともに、トビニタイ遺跡 1 号竪穴の床面上で検出されたと報告された、ソーメン紋土器 1 ・3（1・2、3）の出土状況を、改めてどのように説明するのか。

続いて、藤本 d 群の標本例には、刻紋土器Ｂ（新:16）・擬縄貼付紋土器（17・ソーメン紋土器 1（18））など、幅広い年代のものが含まれている。それに合致するとして菊池が示した資料は、確かにトコロチャシ遺跡 1 号（外側）竪穴の床面からも出土している。また、それに該当する標本例も示されている（10 ～ 12）。

しかしながら、トビニタイ遺跡 1 号竪穴の床面では、

（1）10・16・17 例などの資料は、まったく出土していない。この点は、ウトロチャシコツ下 1 号竪穴の 3 層においても全く変わりない。

（2）藤本 e 群の標本例には、擬縄貼付紋土器（19 = 17）とソーメン紋土器（20 ～ 22）が含まれている。それに合致する資料は、トコロチャシ遺跡 1 号（内側）竪穴の床面でも検出されている。内容的には、トビニタイ遺跡 1 号竪穴に対比されるソーメン紋土器 1（20 = 1・2）とソーメン紋土器 2（21、22 ？）の二者を含むが、後者のみ e 群として図示された 13 ～ 15 例に該当する。ただし、それらは型式学的にみると、トビニタイ遺跡 1 号竪穴の床面から出土したとされた 3 例よりも明らかに古いものに属す。

以上の疑問点や矛盾点を、合理的に解決するのは容易でない。とりわけ、トビニタイ遺跡 2 号竪穴の床面から出土したトビニタイ土器群Ⅰを、先行する 1 号竪穴の土器群、すなわち藤本 d 群（1・2 = 23 ～ 26）に対比することは、菊池氏の編年構想に見られる最も大きな問題点と言える。このため擦文式土器との対比に関しても、同様の問題点がそのまま持ち込まれることになる。

菊池氏が石附と同様に、ウトロチャシコツ下遺跡の層位事実（第 1 図・第 1 表）、すなわち「トビニタイ土器群Ⅱ→ソーメン紋土器（藤本 e 群）」の序列に関する記述を見落とすか、あるいは誤解していなければ、「トビニタイ土器群」を軸とした新しい北方編年案は、まったく異なる体系として提出されたのであろう。さらに、トコロチャシ遺跡 1 号（内側）竪穴住居址床面において、藤本 e 群に伴出したとされる糸切り底を持つ土師器坏[8]の由来と年代を考慮した場合には、オホーツク式土器の終末年代に関しても、大陸系の渡来文物の年代観（駒井 1948a・児玉 1948、山内 1964 ほか）を念頭に置きつつ、全く異なる見解を導くことになったのではなかろうか。

3．『ピラガ丘遺跡（Ⅲ）』・『二ツ岩』以後に登場した新編年観

ピラガ丘遺跡群は1970年～1973年にかけて調査された。擦紋Ⅲ･Ⅳとトビニタイ土器群の「共伴」事実が確認されたとして、その後、速やかに石附・菊池両氏の編年案に疑問符を付ける成果が、相次いで刊行された（米村1970・1972・金盛1974・1976a・b）。それに続いて、山内博士の新北方編年案といわゆる「東大編年」が相克する北方編年の研究状況を一変させたのは、1975～1979年まで継続された網走市の二ツ岩遺跡の発掘調査であった（野村・平川編1982）。また、その成果を強力に傍証する役割を果たした標津町カリカリウス遺跡の調査と、トビニタイ土器群Ⅰと擦文式土器の関係に新知見をもたらした須藤遺跡の調査（金盛1981）は、二ッ岩遺跡と共に、通説編年の編成に際して格別扱いで重視されている（椙田1982・金盛・椙田1984、宇田川1988・右代1991ほか）。

1）『発掘された北の文化』の接触編年観（北海道開拓記念館　1983）

二ツ岩遺跡の報告書は、第4次調査から3年後の1976年に刊行された。それから7年後に北海道開拓記念館では、「発掘された北の文化－続縄文･擦文･オホーツク文化－」と題した特別展を開催し、調査成果をコンパクトに整理して公開した。これまで特に注意されていないが、展示図録（北海道開拓記念館編1983）には、擦文式・オホーツク式土器の編年模式図（3頁）や「接触・融合」に係わる土器標本（21頁）が示されている〔**第5図**〕。

通説を支持する大方の人は、この図を見ても特に違和感を抱くことはないのであろう。逆転編年説の立場から見ると、まさに通説編年が抱える編年上の問題点を最も象徴的に示した、「接触・融合」説に係わる最初の考案のように思われる。なぜ、そのような感想を持つのか。以下、この図の標本例をルーツとして、土器と竪穴の接触･同化･融合（吸収）の模式図や標本例の扱い方の変遷をたどり、それらに内包される問題点を細かく検討していきたい。

2）土器から見た、接触編年観の疑問点

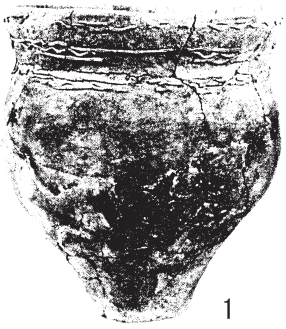
展示図録中の「**消えたオホーツク人**」の項では、次のような解説が示されている。例示された標本を挿入し、引用してみよう。

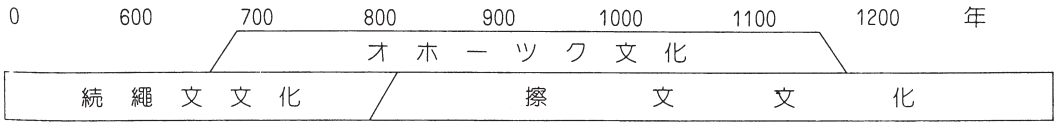
(1) 北海道の東部では､非常にかわった土器が出土する。それは､擦文式土器(2･4)の器形に近く、オホーツク式（1＝3）の文様である貼付文を持つ土器（5）である。

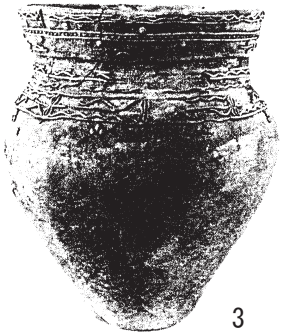
(2) 両文化の土器の特色を兼ね備えた土器（5：「オホーツクと擦文が融合した土器」）は、両文化の接触・融合があったことを示してくれる。

1・3例のソーメン紋土器は、オホーツク文化の終末期を代表する標本例であり、ソーメン紋土器3に比定される（柳澤2007b：53-56）。これに対して4例は、擦紋Ⅳ6類（柳澤2010a）に比定される須藤遺跡H23号出土の土器で、トビニタイ土器群Ⅰを伴出している。上段の図式をみると、両者は時代を異にした標本例であることが明示されている。1例は9世紀代、2例は12世紀代頃と、おそらく想定されているのであろう。

それでは、なぜ300年も懸け離れた年代の標本例を示して、擦文式とオホーツク式の「接触･融合」現象を解説したのであろうか。二ツ岩遺跡の報告書によると、1・3例の仲間は「擦文第1ないし第2の時期」、つまり8～9世紀代の土器と年代的に併行すると想定されている（野村・平川編1982：117-118）。したがって第5図では、まさにその時期に擦文式とオホーツク式土器終末段階の1･3例が、その「接触」したことを表しているのであろう。それでは何故、擦文前期の標本例を用いて、オホーツク式との「接触」を図解しなかったのであろうか。

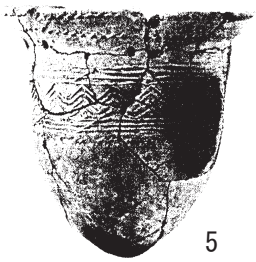






オホーツク式土器　H22.0cm（No.374）

擦文式土器　H23.0cm（No.376）



オホーツクと擦文が融合した土器
H18.5cm（No.375）

第５図　『発掘された北の文化－続縄文・擦文・オホーツク文化－』の編年と接触・融合土器モデル

つぎに「融合」現象である。5例のトビニタイ土器群Ⅱは、ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）の調査成果によると、擦紋Ⅲと同時代のほぼ10世紀代に比定されている。5例を標本例として、オホーツク土器が変容し、「擦文化」（菊池1972：457･459）していく途中段階を「融合」と捉えるのであれば、当然ながら、10世紀代の擦紋Ⅲとトビニタイ土器群Ⅱの5例を以て図示し、解説されるべきであろう。何故そのパートナーとして、12世紀代に比定する2・4例を採用したのであろうか。

このように石附編年で具体的に検討された「接触・同化」現象は、1983年の時点においても、いまだ同時代の文物を用いて模式化し、解説し得ない状況が続いている。仮に3～5例の標本例を示して、「接触・融合」現象を解説することが、図録編成上の方便であったとすれば、それは考古学的には本末転倒であろう。果たして、以上の標本例の扱い方は、どのように理解すれば良いのであろうか。視点を変えて、さらに検討してみよう。

3）竪穴と出土土器から見た疑問点

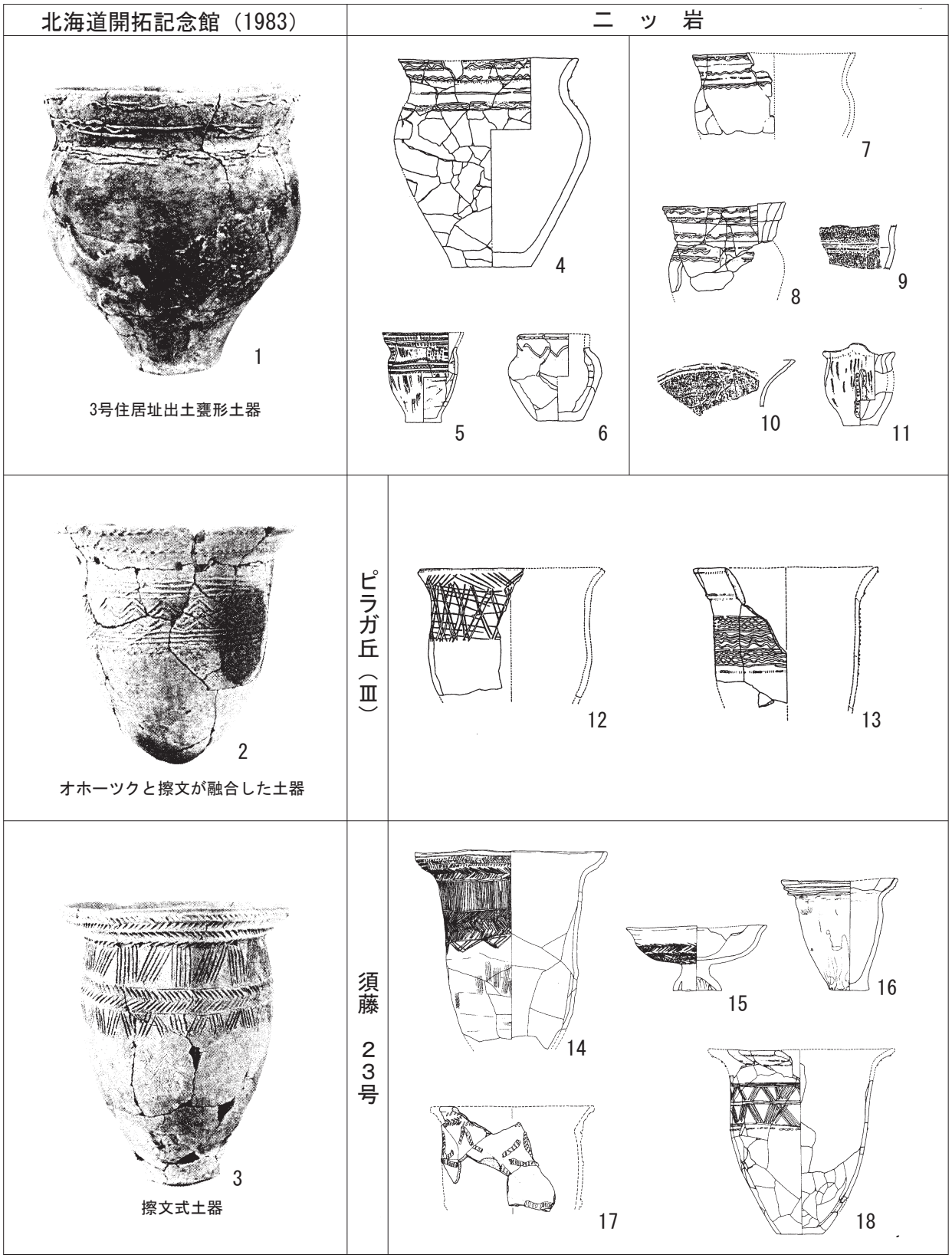
オホーツク式と擦文式の接触・融合モデルに利用された、竪穴出土の土器群は、**第6図**に示したとおり各々が異なる時期に属している。また系統的にもかなり複雑な様相を示す。発掘調査では頻繁に経験することであるが、竪穴床面上の土器群が型式学的に、単純な纏まりを示すことは稀である。通常は、複数の時期を異にした土器群が様々な比率で伴出（混在）する。それらを一括し、あるいは一部を任意に取り出して、一時期（「共伴」）のものと見做す意見もある（藤本1966、大井1972b、熊木2000ほか）。しかし、他の「単純な内容」を示す竪穴と比べれば、「複雑な内容」の土器群が、複数の細別型式に細分されることは、誰でも容易に理解できることであろう（山内1937）。

例えば、モヨロ貝塚10号竪穴の床面・骨塚からは、(a) 擬縄貼付紋土器、(b) ソーメン紋土器1、(c) ソーメン文土器3などが、それぞれ纏まって検出されている。今まで蓄積された資料を踏まえると、これらが別の細別型式に属し、記載の順序で変遷することは、型式・層位・地点差等の明瞭な違いから見て、疑う余地が無いと考えられる（柳澤1999bほか）。

それでは、通説編年を支える二ツ岩遺跡の竪穴資料を改めて観察してみよう（柳澤2007a）。先の融合モデルに利用された土器（1）は3号竪穴の床面から出土したもので、ソーメン紋土器3に比定される。別にソーメン紋土器2（7）も見られる。特に、壁際に厚く堆積した焼土中からは、ソーメン紋土器3（8）や続縄紋土器（11）、それに擦文前期の土器片（9）なども検出されている。その口縁部片（10）は竪穴外にも存在する。このように床面・焼土中には、系統・時期を異にした資料が混在しており、出土状況から見ても、9・10例と11例が生活道具として同時期に利用されていたとは容易に想像できない。9～11例は、竪穴の構築の際に破壊した古い竪穴に由来し、遥かに古い小型の続縄紋土器（11）は、儀礼的に扱われた「古い土器」であると考えられる。したがって通説のように、9例や11例と床面上のソーメン紋土器2・3（7・8）の関係を単純に「共伴」であると認め、その年代を8～9世紀代に求めることには、論理上の飛躍があるように思われる（柳澤2003・2007aほか）。

そこで2号竪穴の出土事例も比較してみたい。ここでも床面上にはソーメン紋土器3（4）があり、骨塚中では、在地系の擦紋Ⅱ（5）と擬縄貼付紋土器（6）が検出されている。どちらも完形の小型品である。トコロチャシ遺跡の7号竪穴でも、やはり骨塚から続縄紋土器や擬縄貼付紋土器の完形品が、ソーメン紋土器とともに発見されている（柳澤2005a：120-124）。

また、モヨロ貝塚の10号竪穴においても、床面上のソーメン紋土器1・3とは異なる、「古かるべき土器」の骨塚からの出土が夙に注意されている（佐藤・駒井1964）。その観察に学ぶと、二ツ岩遺跡の事例も、佐藤達夫が指摘した「古かるべき土器（「古い土器」）、すなわち古い時代の遺構に由来する土器に相当すると見做せる。したがって5・6例などを、モヨロ貝塚における層位事実（名取



第６図　接触・融合現象の土器標本例と比較・参照資料

1948a・b、児玉 1948、柳澤 1999b）も参照すると、ソーメン紋土器と同時代の文物としては決して扱えない。

たとえば通説の編年観に合わせて、4 例＝5 例と想定し、他方 6 例を骨塚への混入品と見なした場合、トコロチャシ遺跡の事例でも、大型の擬縄貼付紋土器（2 点）を任意に混入扱いすることになろう。どのような出土状況も合理的に矛盾なく捉えるためには、先にも指摘したように、「古い土器」（5･6）の儀礼的な扱い（柳澤 2000：31；註 9、2003：137-159）を想定するほかない。そのような観点に立つと、1 例の標本が 8 ～ 9 世紀に位置するかどうかは、「共伴」扱いされた資料（5・9）から、単純に確定できないことが了解されるであろう。

次に「融合」現象に由来するとされた、ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）の 3 号竪穴の標本例（2）を検討したい。竪穴の木炭層下からは擦紋Ⅲの古い土器（12）が、そして獣骨面（13）よりトビニタイ土器群Ⅱが検出されている。報告では、12 例と 13 例は同時期とは言い切れない、としながらも、「共伴」の可能性を考慮している（金盛 1976a・b）。通説では、この事例を単純に「共伴」と見做し、トビニタイ土器群Ⅱは 10 世紀代の所産と捉えている。しかしながら、木炭層下の 12 例は古い時代の竪穴に伴う土器であって、木炭層及び床面より上の層準のものが新しい時代に属すとも想定できる。したがってこの出土事例も、擬似的な「共伴」である可能性が考慮されよう。層位・型式の両面から詳しく検討すると、擦紋Ⅲとトビニタイ土器群Ⅱは、まったく別時代の所産であることが判明する（柳澤 2005a：104-106、柳澤 2007b･2010c）。前者は 9 世紀末～ 10 世紀に比定され、後者は 1･4･7･8 例のソーメン紋土器とともに、12 世紀代まで下るものと思われる（柳澤 2008c：629-631、2012d：182-183）。

以上の観察によると、8 ～ 9 世紀代とされたソーメン紋土器と、通説では 12 世紀代とされる擦文土器（3）の接触から、融合土器として 10 世紀代のトビニタイ土器群Ⅱ（2）が成立したとする標本例は、同時代の標本例と差し替えなければならないことが、自ずと了解されるであろう。

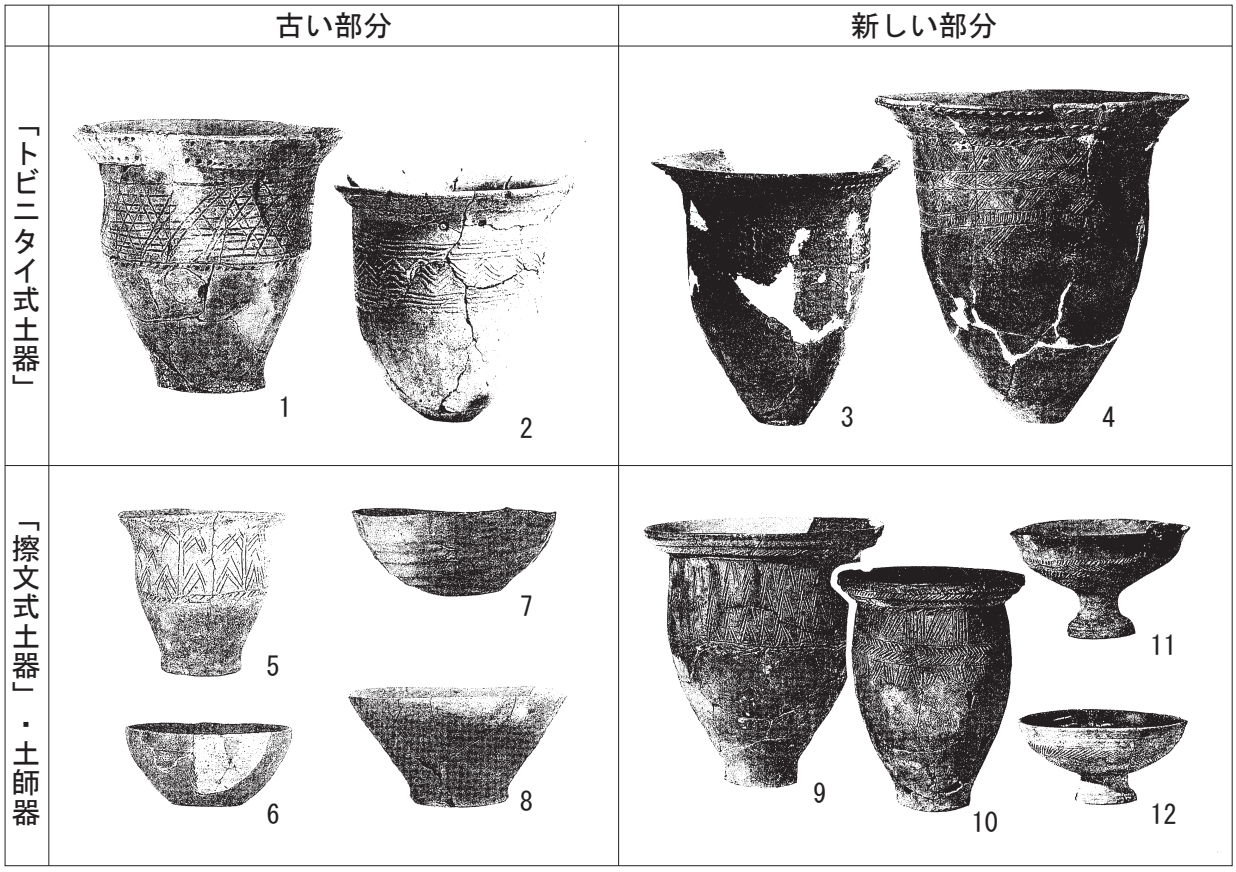
いつ頃に、オホーツク式と擦文土器の接触が始まり、何処でどのようにして両者の融合が進み、やがて同化・吸収される、つまり「擦文化」されるに至ったのか。そのプロセスを逐一、同時代の土器や竪穴、その他の情報を用いて、地域ごとに精確に解明することができれば、また、大陸から渡来した文物（「遼時代の素焼土器」・鐸など）の対比にも成功するならば、ほぼ定説化した通説編年の妥当性が、考古学的に見て初めて検証されたと言えるであろう。

それでは、石附・菊池編年案を大幅に改変した北海道開拓記念館の新編年案は、その後どのように見直され、以上の疑問点や問題点が解消されたであろうか。

3）『消えた北方民族』における同化・融合編年説

1987 年、斜里町立知床博物館では、ピラガ丘遺跡群（1970 ～ 1976）と須藤遺跡（1978 ～ 1980）の調査成果をふまえて、二ツ岩遺跡（野村・平川 1982）やカリカリウス遺跡（椙田 1982）の成果も参照しつつ、オホーツク文化の終焉プロセスに焦点を当てた特別展を開催した（金盛編 1987）。

この特別展に先立ち、これを企画･主導した金盛氏は、カリカリウス遺跡を調査した椙田氏と共に、東大編年や石附・菊池編年案に正面からの疑問を呈す新しい北方編年の構想を、『考古学ジャーナル』誌上に発表している（金盛・椙田 1984）。したがって展覧会の図録は、斜里町における発掘調査の成果と新北方編年案の概要を広く普及するために、特別に企画されたものであると考えられる。その点でも学史的には注目すべき展覧会であった、と言えよう。



第７図　ピラガ丘遺跡・須藤遺跡の擦文土器とトビニタイ土器群Ⅰ～Ⅲ

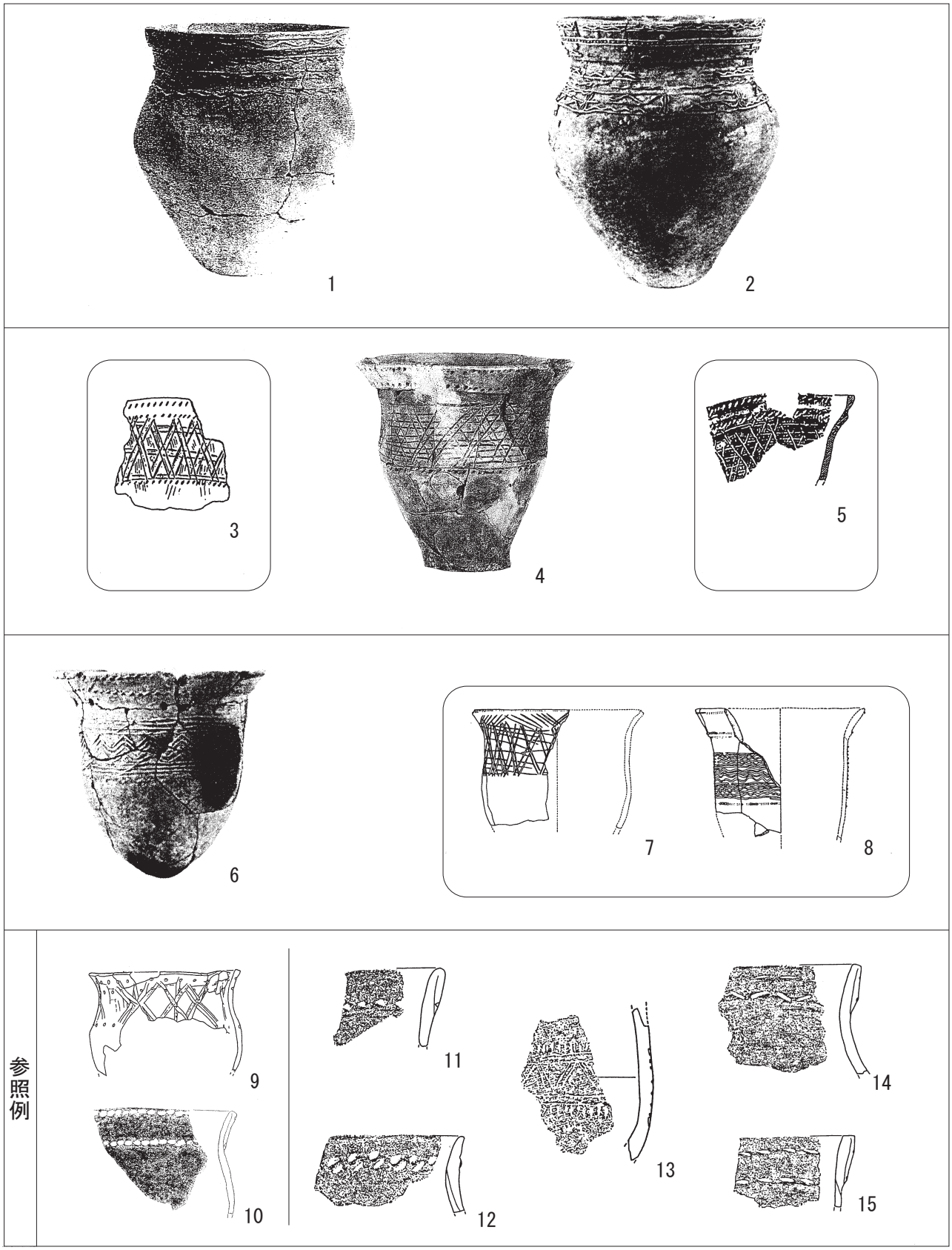
(a) 提示された接触・融合を示唆する土器群

図録の「はじめに」では、次のように特別展の主旨が語られている（下線・ゴチック：筆者）。

「斜里町教育委員会では昭和45年以来、5回にわたってピラガ丘の古代集落を発掘しました」。（中略）「その後の研究の結果、オホーツク文化と擦文文化とが斜里地方で**接触**し、次第にオホーツク文化人が数で優れる擦文人に**吸収同化**されてしまったらしいということがわかってきました。」（中略）今回の特別展では、「オホーツク文化がどの様にして始まり、そして消えていったかを訪ねてみようとするものです。」

本文では、「オホーツク文化と擦文文化が斜里地方でも**接触**を繰り返し、とうとう**融合**して新しい文化が生み出されます。この接触と融合によって新しく生まれた文化を」「トビニタイ文化」と呼んでいるとして、その過程を示す標本例として、後節では**第７図**に示したように、須藤遺跡を含む「ピラガ丘遺跡群」の標本例が示されている。2例はトビニタイ土器群Ⅱ、4例はトビニタイ土器群Ⅰに比定される。そして3例が、両者の中間に位置するものと思われる（Ⅰ-Ⅱ）。

通説によると、これらは「2例→3例→4例」の順序で変遷し、4例はほぼ9～12例の擦紋Ⅳに併行するとされる。これに対して1例は2例と、また5～8例ともほぼ並行するものとされ、10世紀代に比定される。全体的に見ると、1・2例の時期に接触し、その後3・4例の時期に融合が進み、最終的に同化を遂げたと捉えるわけである。したがってこの展覧会において初めて、石附・菊池編年と全く異なる変遷観が明確に標本例を示して図解されたことは、一目瞭然に認められるであろう。なるほど、豊富に物的な証拠が示されているから、この変遷観には、どこにも疑問点は無さそうに見える。



第 8 図　接触・融合現象を示す土器標本例と参照資料

しかし、その実態はどうであろうか。

(b) 接触・融合・同化モデルの疑問点〔第 8 図〕

ピラガ丘遺跡の 3 号竪穴から出土した擦紋Ⅲ（7）とトビニタイ土器群Ⅱ（6・8）が、想定されたとおり同時代でなければ、石附・菊池編年を刷新した接触・融合・同化論は成立しない。「土器の変化」の節では、「ソーメン文を持つ土器は北海道にきてから東部で生まれた文化の反映」であり、「擦文式土器と融合してトビニタイ式土器に変わるのを最後に北海道から（オホーツク文化人は）姿を消します」、と説明されている。

1･2 例は、この節で例示されたソーメン紋土器である。融合のプロセスは1･2例と擦文土器が接触し、7 例の時期には、6 例や 8 例の融合土器が成立したと捉える。だが、この想定は土器の側から十分に検証されてはいない。そこで、最近報告された知床半島ウトロ遺跡の新資料を観察したい。PIT114（竪穴）上層遺構から 11 ～ 15 例のような土器が検出されている。掲載された資料で見る限り、それらより新しい時期のものは見当たらない。刻紋土器が主体を占めており、それに 13 例のごとき、風変わりな破片が伴出している。特に記述はないので、おおらく胎土や焼成は他の刻紋土器と変わりないのであろう。

ただし胴部下半に施された紋様は、オホーツク式のものとは言えない。上下の並行沈線内に 2 本沈線で鋸歯紋を挿入し、その上下を短刻線で縁取っている。若干の隙間をおいて、さらに上部に同じ紋様帯が施されていたと推測される。おそらく複段構成の鋸歯紋土器と見做して誤りないであろう。モチーフの扱い方は稚拙であり、擦紋Ⅱの複段文様を模倣したもの（模倣土器）と推測される。

この観察によると、通説でソーメン文土器と接触したとされる擦文前期土器（擦紋Ⅱ）は、オホーツク式土器の刻紋土器 A に並行する、という仮説が自ずと立てられる。つまり刻紋土器は 9 世紀代の所産である可能性が高いと想定される。それでは、擦文式とソーメン紋土器（1・2）の融合によって成立したとされるトビニタイ土器群Ⅱ（6・8）については、どのように捉えられるであろうか。

擦紋Ⅲに比定される 4 例が、7 例とともに同時代とされる標本例である。しかし一瞥して気づくように、4 例の口縁部は顎状に肥厚し、刺突紋がやや深く上下に加えられている。また胴部には、7 例に対比される斜格子目紋が施されている。このような折衷的な土器は、今ではすっかり「忘失」されているが、かつてモヨロ貝塚（3）やトコロチャシ遺跡（5）などでも検出されていた（柳澤 1999b：84-91、2006b：83-91）。いずれも口縁部は刻紋土器系で胴部が擦紋系という、折衷的な紋様構成の資料である。モヨロ貝塚やウトロ遺跡でも、4 例に類似した刻紋土器の破片が出土している（9、10）。この手の口縁部が刻紋土器 A・B（擦紋Ⅱ・Ⅲ並行）のどちらに属するのか微妙である。しかし胴部紋様が、7 例とともに擦紋Ⅲの古い時期に比定されることから見て、旧稿で繰り返し指摘したとおり、刻紋土器 B に比定されるものと考えられる（前出、2007a：47-57 ほか）。

そのように 4 例をキメラ（折衷）土器と捉えると、トビニタイ土器群Ⅱ（6・8）と並行するとされた擦紋Ⅲ（7・4）は、刻紋土器 B に併行することが改めて了解されよう。そこで土器それ自体の観察から、接触と融合のプロセスを検証すると、

(1) 擦紋Ⅱ（「擦文前期」）＝ 刻紋土器 A

(2) 擦紋Ⅲ（古い部分）　＝ 刻紋土器 B（＝道北：刻紋・沈線紋土器）

という、通説を逆転した編年案が仮設されることになる。

二ツ岩遺跡やピラガ丘遺跡群、そしてカリカリウス遺跡の調査成果を、矛盾なく統合した新編年案に対して、なぜ山内博士の新北方編年説（山内 1969）を支持するような真逆の編年案が想定できるのであろうか。そうした「覆水を盆に返す」編年試案を発表したのは、今から 10 数年前の 1999 年

のことであった（柳澤 1999a・b）。それと同じ年に土器・竪穴の規範的な融合・同化プロセスを示す模式図や標本例が新たに公表された（北海道開拓記念館編 1999）。これは 1983 年展示図録（第 5 図）の「新版」に当たると考えられるものである。

4.『アイヌ文化の成立』（北海道開拓記念館編 1999）に見える同化・吸収の新モデル

北海道開拓記念館では常設展示の解説書を刊行しており、その第 2 冊は「アイヌ文化の成立」をテーマとしている。その中の「オホーツク文化」の節は、金盛・椙田論文（1984）や宇田川論文（1988）、そして右代論文（右代 1991）以後では、擦文文化とオホーツク文化の接触、同化・吸収を論じた解説として、最も代表的なものと認められる。

1）「擦文文化への同化」について

オホーツク文化が擦文文化に「同化」したプロセスについては、提示された標本例を加えて記述を整理すると、次のように摘要される（**第 9 図**[9]、（　）・下線の挿入は筆者）。

(1) 道東における両文化の接触は、オホーツク文化終末（ソーメン文土器）の二ツ岩遺跡の「住居内骨塚から擦文土器が出土したこと」によって、「9 世紀末」であることが判明した。

(2)「擦文文化が本格的に北海道東部に進出するのは、オホーツク文化がサハリンに撤退した 9 世紀末以降である。」

(3) 石狩低地帯の勢力は、「10 世紀にはオホーツク海沿岸域まで分布を拡げる。」「この時期、オホーツク文化の系統をひく人々が、北海道東部の限られた地域にのこされるようになる。」

(4)「この人たちは、トビニタイ土器を使用し、これまで海洋に依存した生活から内陸の河川へと生活域が変化するとともに、遺跡の立地も多様化し住居も小形化していった。」

(5) 土器は、「擦文土器とオホーツク式土器の両方の特徴をそなえ、後半になると擦文土器そのものになる（1 ＋ 2 → 3 → 4 → ＋）。」住居は、「小形化し、かつての石組炉はのこされるものの、擦文文化の竪穴住居構造により近く変化する（A ＋ B → C）。」

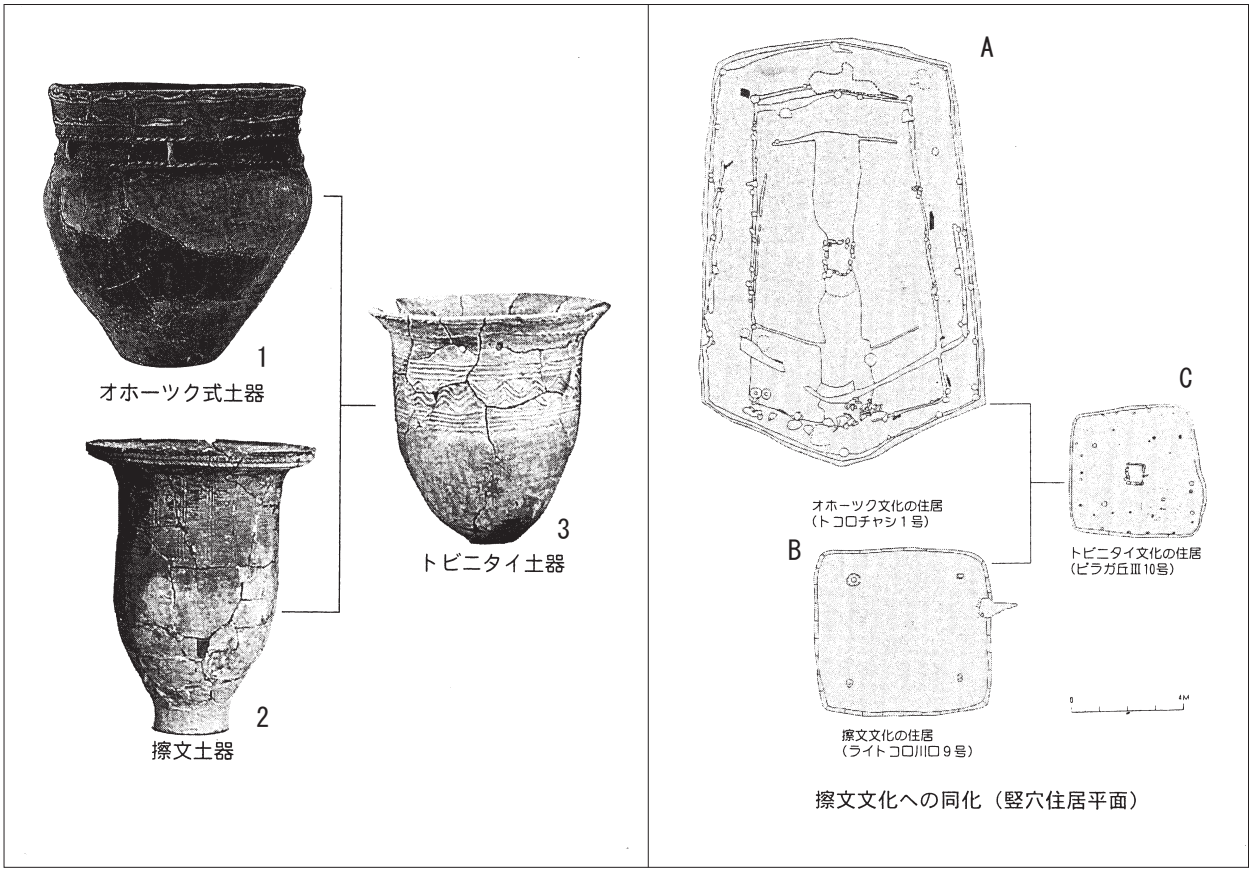
(6) 以上のように、擦文文化とオホーツク文化が「接触」した結果、後者の「社会構造」が崩され、「遺跡の立地」や「居住形態」、さらに土器などにも大きな変化が現れた。こうしたプロセスは、オホーツク文化が「擦文文化に吸収される過程を物語っている。」

さて、この解説をふまえて、図録に掲載された土器標本と竪穴の接触・変容モデルを検討してみたい。おそらく通説を支持する立場では、特に疑問点は見当たらないと考えるであろう。果たして、そのとおりであろうか。初めに土器標本について、それから竪穴の順に、知床博物館協会の図録（金盛編 1987）を念頭に置きながら、以下細かく検討を進める。

2）土器から見た「同化・吸収」モデルの疑問点〔第 10 図〕

オホーツク式土器が「9 世紀末」に終焉し、擦文土器と接触してトビニタイ土器群Ⅱが成立する。その後はトビニタイ土器群Ⅰへと移行し、やがて擦文土器に「同化」するに至るとして、ほぼ 300 余年に亘るオホーツク式系土器の変容プロセスが想定されている。それでは提示された土器標本の図式は、どの時点における「同化」の状況を示しているのであろうか。

「擦文文化への同化（土器）」を象徴する、代表的な標本例としては、 a）トコロチャシ遺跡 1 号竪穴（1）、 b）ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）3 号竪穴（10）、 c）高砂遺跡の資料（13）が選ばれている。

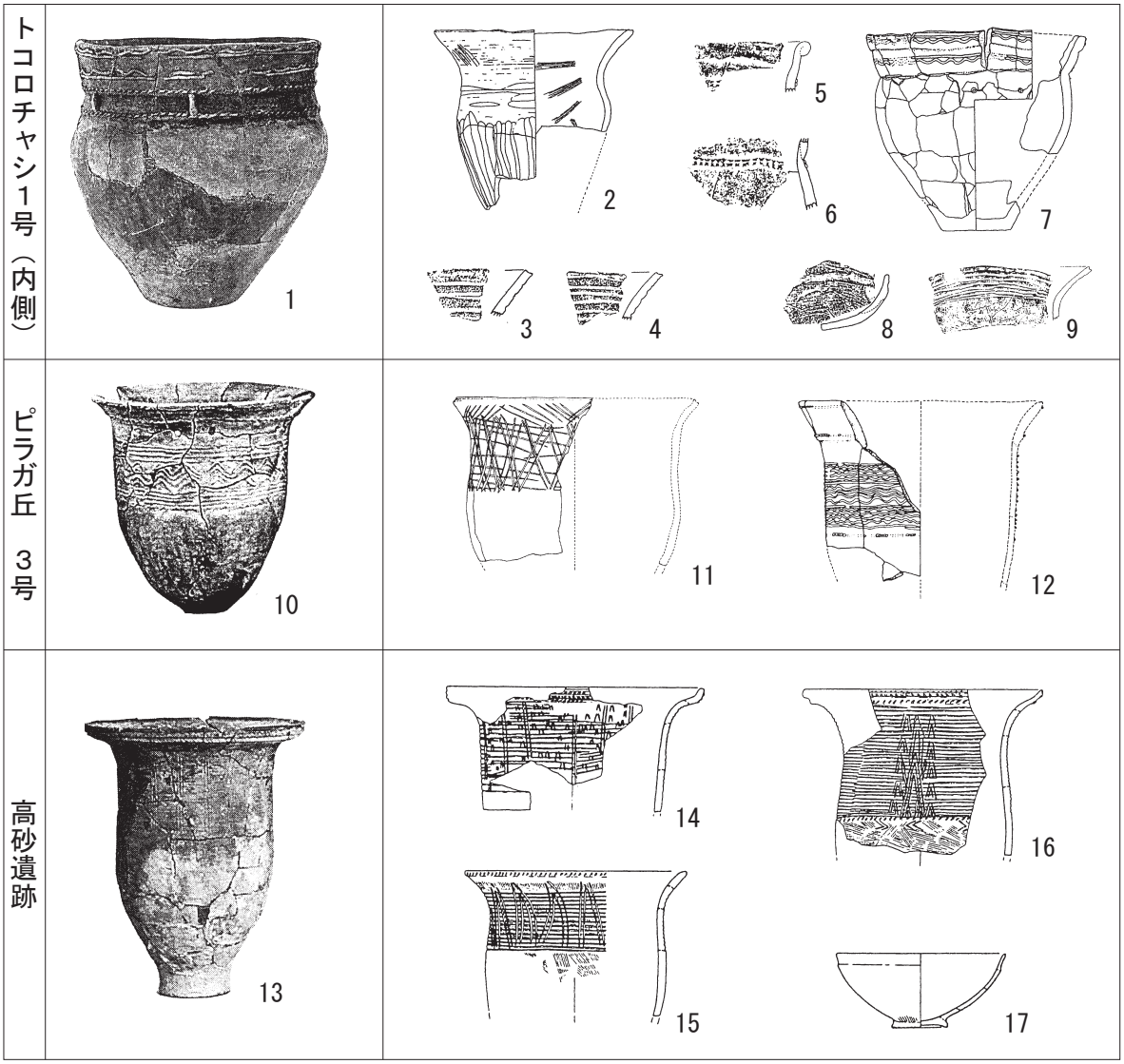


第９図　「アイヌ文化の成立」に見える土器と竪穴の「同化」モデル

しかしながら、道東における「同化」現象の標本例として、道北の13例を採用することは妥当であろうか。また、それぞれの時期についてはどうであろうか。筆者の編年案では、1例はソーメン紋土器2に、10例はトビニタイ土器群Ⅱ⑸類に、そして13例は擦紋Ⅲ（新）に比定される。通説編年では1例を9世紀末、10例を10世紀代、そして13例も10世紀代と捉える。したがって年代の比定が正しいとすれば、ほぼ一時期における「同化」現象を示す標本例が選択されていると認められる。しかし、13例を道東の標本と取り換えた場合でも、この模式図に問題は無いのであろうか。

(1) ソーメン紋土器（1）と擦文前期（2～4・8・9）を同時代と捉えるならば、出土状況からみて両者は同時代に作られ、竪穴内で実際に使われていたと見做すほかない。それでは、なぜ同時代性を示す具体的な特徴が、どちらの土器にも残されていないのか。ソーメン紋土器の終焉に関しては、一般に擦文土器（前期）の強い影響、擦文集団の優勢が想定されているだけに、土器変容ないしキメラ現象の兆候が見られないのは、いささか不自然であると言えよう。

(2) ピラガ丘遺跡では、トビニタイ土器群Ⅱに擦紋Ⅲが「共伴」した可能性が高い、と捉えられている（金盛1976b）。実例では、10例と11例に対する擦紋Ⅲ（1）類の12例が挙げられる。3号竪穴内で双方の土器が使用されていたと想定されているが、ここでもキメラ的な現象は認められない。仮に通説どおりに、10・11例と12例が同時代に接触したと想定した場合、果たして、10・11例の誕生を型式学的に説明できるであろうか。同じことは、ソーメン紋土器（1）と擦紋Ⅱ（2～4）や擦紋Ⅲ（12）の接触を想定した場合にも指摘されることである。



第 10 図　土器の接触・融合標本例と参照資料

言い換えると、ソーメン紋土器 2（1）からトビニタイ土器群Ⅱ（10）への変遷と、「擦文前期」（2・3）から擦文Ⅲ（1）類への変遷が、仮に通説どおりに同期すると見た場合、トビニタイ土器群Ⅱが成立する事情を合理的に説明できるのか、という疑問が生じるということである。

(3) 標本例の関係図式では、ソーメン紋土器 2 と擦紋Ⅲ（1）類が同時代に接触した結果、トビニタイ土器群Ⅱ（5）類の 10・12 例が成立したと捉えている。しかし、これらはとても同時代の土器とは認められない。10 例と「共伴」したとされる、12 例に相当な年代差があることは、おそらく論を俟たないであろう。私見によると、1・10 例との間には、数百年の年代差があると思われる（柳澤 2007b・2008c）。異なる時代の土器が接触できないことは自明の理であるから、以上の「同化」・融合論は成立しないと考えられよう。

3）竪穴と出土土器から見た「同化」論の疑問点

それでは竪穴に関してはどうであろうか。果たして先史考古学の原則に従って、同時代の文物が正しく対比されているであろうか〔**第 11 図**〕。

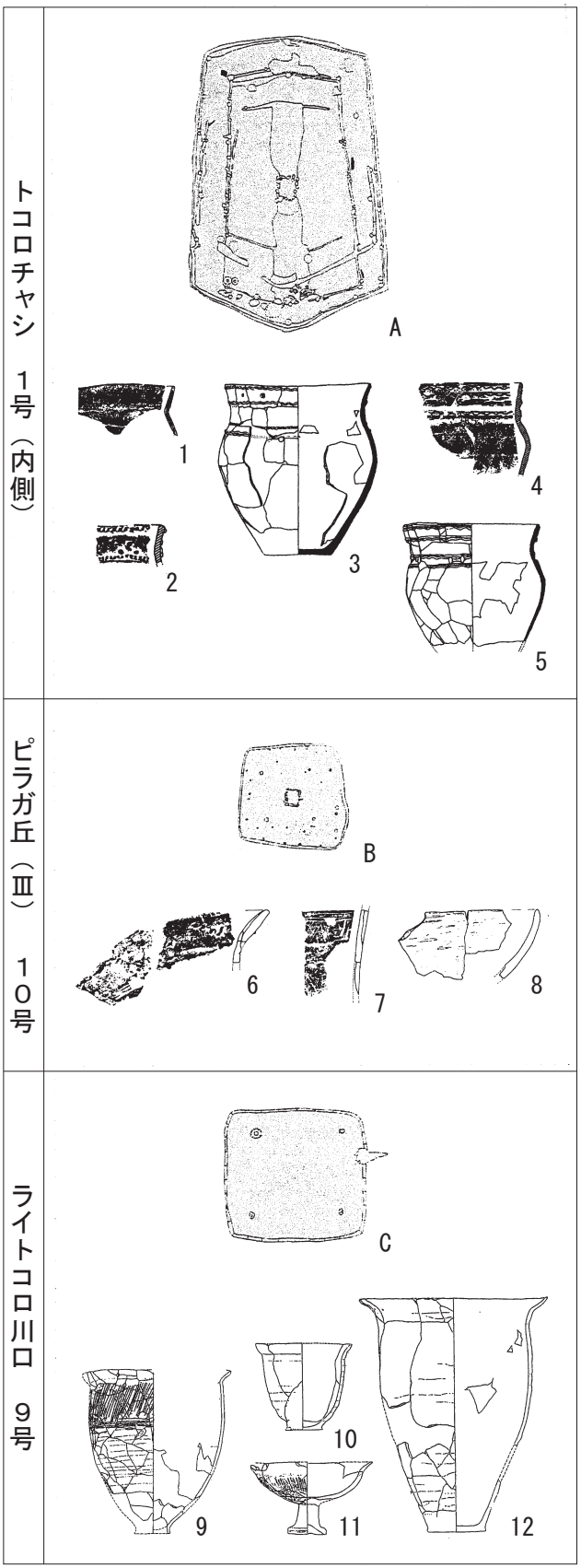
竪穴の標本例は北見市（旧常呂町）から２箇所、斜里町から１箇所の遺跡が選ばれている。この範囲で、竪穴の「同化」現象が明瞭に捉えられるということであろうか。トコロチャシ遺跡１号竪穴(A)は３期以上に亘って利用された、と推定される。刻紋土器（1)、擬縄貼付紋土器(4)、そしてソーメン紋土器１（3)・２（5）の時期である。おそらく提示された底辺の張る五角形プランは、後二者の時期に係るものであろう(柳澤 1999b ほか)。それに対して、ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）の３号竪穴（B）は隅丸不整方形プランで、トコロチャシ遺跡に類似した石囲炉を有するが、骨塚を欠いている。柱穴の配置も異なるので、上屋構造に大きな違いがあると推定される。この竪穴は第 10 図の模式図によれば、ライトコロ川口遺跡の９号竪穴（C）とトコロチャシ遺跡１号竪穴（A）が接触して成立したとされている。なる程、Ｂプランの竪穴の基本形はＣプランに由来し、石囲炉はＡプランのそれを継承したと考えられる。大型のＡプランから小型のＢプランへの移行は、家族集団の分散化を意味すると解釈できるから、竪穴プランの変容、移行には矛盾は無い。したがって擦文文化への「同化」は徐々に進行したと推測される。おそらく、そのように捉えられているのであろう。それでは、ＡプランからＢプランへの移行は、いつ頃に、どのように行われたのであろうか。そこで次に、各竪穴の時期を示す資料を用いて、竪穴「同化」モデルの妥当性について検討してみよう。

(1) トコロチャシ遺跡１号竪穴：ソーメン紋土器１・２（3・5）

(2) ピラガ丘遺跡（Ⅲ）３号竪穴:擦紋Ⅳ⑻～⑼類（6)・トビニタイ土器群Ⅰ-Ⅱ（7）＋坏（8）

(3) ライトコロ川口遺跡９号竪穴：擦紋Ⅳ⑻類（9～12）

通説によると（1）のＡプランは９世紀末頃とされる。それと接触した（3）のＣプランは 12 世紀頃で、その結果、竪穴の「同化」現象を



第 11 図　竪穴から見た接触・融合モデルと参照土器

生じて、同時期のＢプランが成立した。そのように土器から見た竪穴プランの変化が説明されることになる。もちろん300年間もの年代差があるから、「接触」や「同化」などは、物証を欠いた仮説に留まることになろう。ちなみに、Aプランの竪穴は9世紀末に機能を停止し、すでに埋没過程に入っている。それでは12世紀頃のＢプランの石囲炉は、同時代のどこに居住する集団から取り入れたのであろうか。通説を保留扱いにすると、そうした疑問が自ずと涌くことになろう。

以上のように土器標本から、また竪穴のプランから見ても、石附・菊池編年に内包された編年学上の年来の問題点は、依然として克服されていないことが了解されよう。接触から同化・吸収されるまでのプロセスは、なぜ同時代の文物を用いて、通時的な流れとして、各時期ごとに模式化して説明されないのでろうか。

5.『北の異界－オホーツク海と氷民文化－』（東京大学出版会　2002）より

このビジュアルな冊子は、東京大学の出版会から市販本として刊行された。博物館で刊行する展示の図録としては、かなり異例のことであろう。北方世界の知られざる歴史を解説した図書として注目され、広く読書人に歓迎されたと思われる。分かり易いコラム形式で編集されており、第一線の研究者が様々なテーマの執筆を担当している。「オホーツク人のゆくえ」の項では、オホーツク文化の運命が以下のように解説され、また、ビジュアルに図解されている（宇田川 2002：130-132）

1）接触・融合・同化について

オホーツク文化とは何か。解説によると、それは環オホーツク海古代文化の一つであって、「西暦10世紀頃の最盛期を過ぎると、何故かその姿を消すことになる。」「オホーツク文化の後にトビニタイ文化と呼ばれる文化が続いたが、」土器と竪穴を考えることによって、「問題を解く一つのヒントが得られる」として、擦文文化との「接触」･「融合」･「同化」を示す模式図が掲げられている〔**第12図**〕（下線、（ ）の挿入は筆者）。

この模式図はおそらく、北海道開拓記念館の図録（第9図）を参照し、それを独自に改変したものであろう。土器の標本例は、すべて東大の発掘資料と入れ替え、竪穴もＣ例を除いて交換されている。こうした変更操作は、いったい何を意味するのであろうか。

そこでまず、土器に関する説明を読むと（ゴチック：筆者）、

(1) 最盛期のオホーツク土器は、壺形で粘土紐の貼付文（ソーメン文）を持つものである（2）。

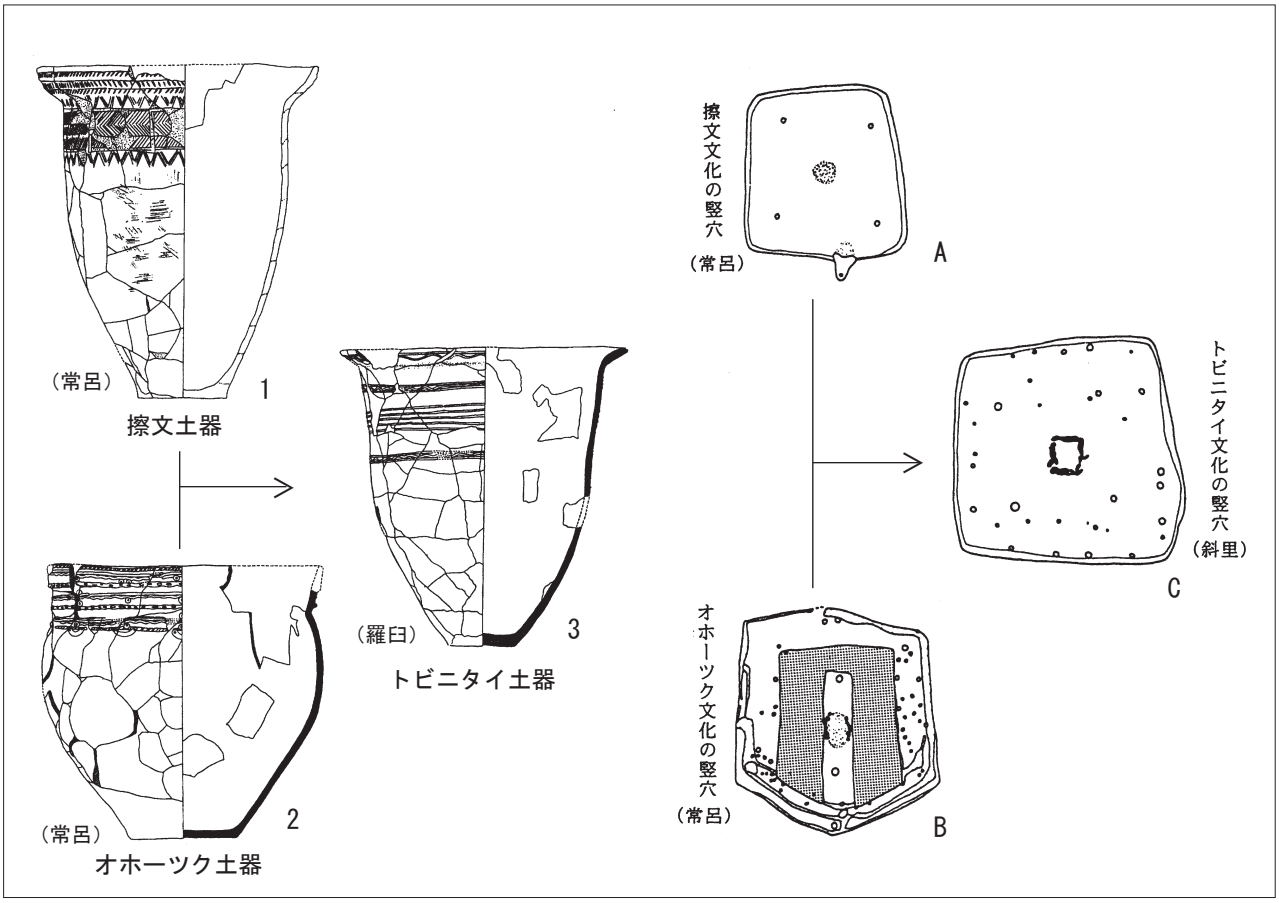
(2) それと「同時代の擦文土器は、甕形ないし、深鉢形で刻線文を施したものである。」

　(1) それらが「融合」あるいは「接触」したような新しい土器群」を「トビニタイ式土器群(3)」と呼ぶ。

(3) トビニタイ土器群は、古いグループ（Ⅱ式：3）と新しいグループ（Ⅰ式）に分けられ、中間のグループも存在する。また「古いタイプとしてカリカリウス式土器群」がある。

(4) これらには、Ⅱ式では「10世紀頃の擦文中期」、Ⅰ式では「13世紀頃の擦文晩期」、中間のグループでは「11～12世紀」の土器が伴出する

として、「従来の考え方」が簡潔に記載されている。続いて、これと少し異なる新しい見方として、大井晴男氏（大井 1994）や、特に大西秀之氏の「ピジン（接触言語）」説（大西 1996b）を引用し、「言葉の壁を乗り越えて、“同化”の道を辿ったのであろう」と推論し、また必ずしも、「すべてのオホーツク人が擦文人に吸収されていったとは思えない」、という自説を述べている。



第 12 図 『北の異界－オホーツク海と氷民文化－』に見える土器と竪穴の接触・融合モデル

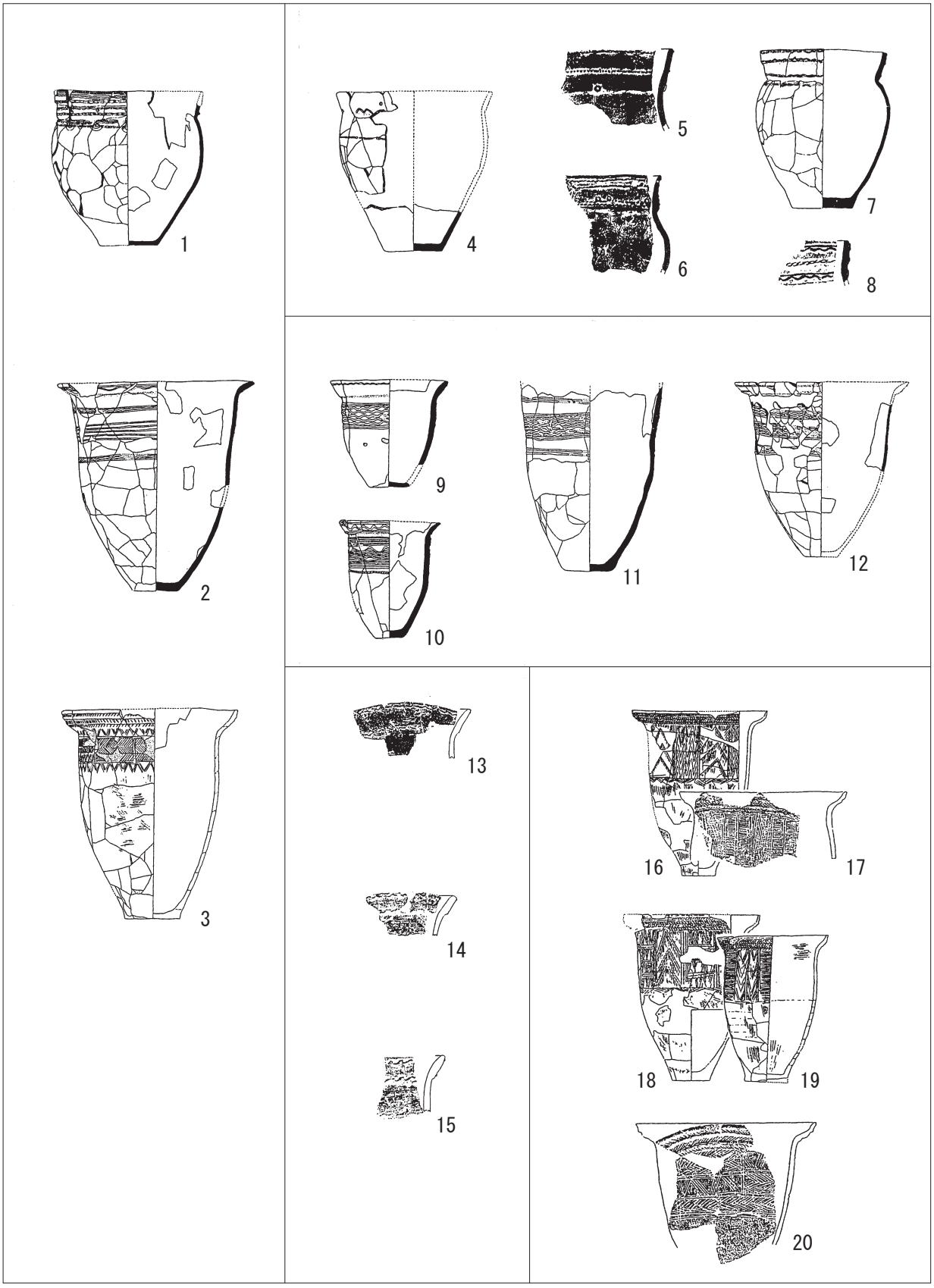
以上の説明によると、最盛期のオホーツク文化はソーメン紋土器（2）の時期で、年代は 10 世紀に比定される。それでは、古いタイプのカリカリウス式土器群は、いったい何世紀に属するのであろうか。後続するトビニタイⅡ式も 10 世紀代とされているが、これは 11 ～ 12 世紀代の擦文土器、すなわち未来の土器である 1 例とは、どのように接触して 3 例のトビニタイⅡ式へと移行したのであろうか。

このように、入れ替えられた土器標本は 400 年もの年代差を内包している。したがって「接触」・「融合」・「同化」のプロセス、すなわち「トビニタイ文化の土器」の「成立過程」を、図式的に示しているとは認められない。そこで視点を変えて、この図式の妥当性について、さらに検討してみよう。

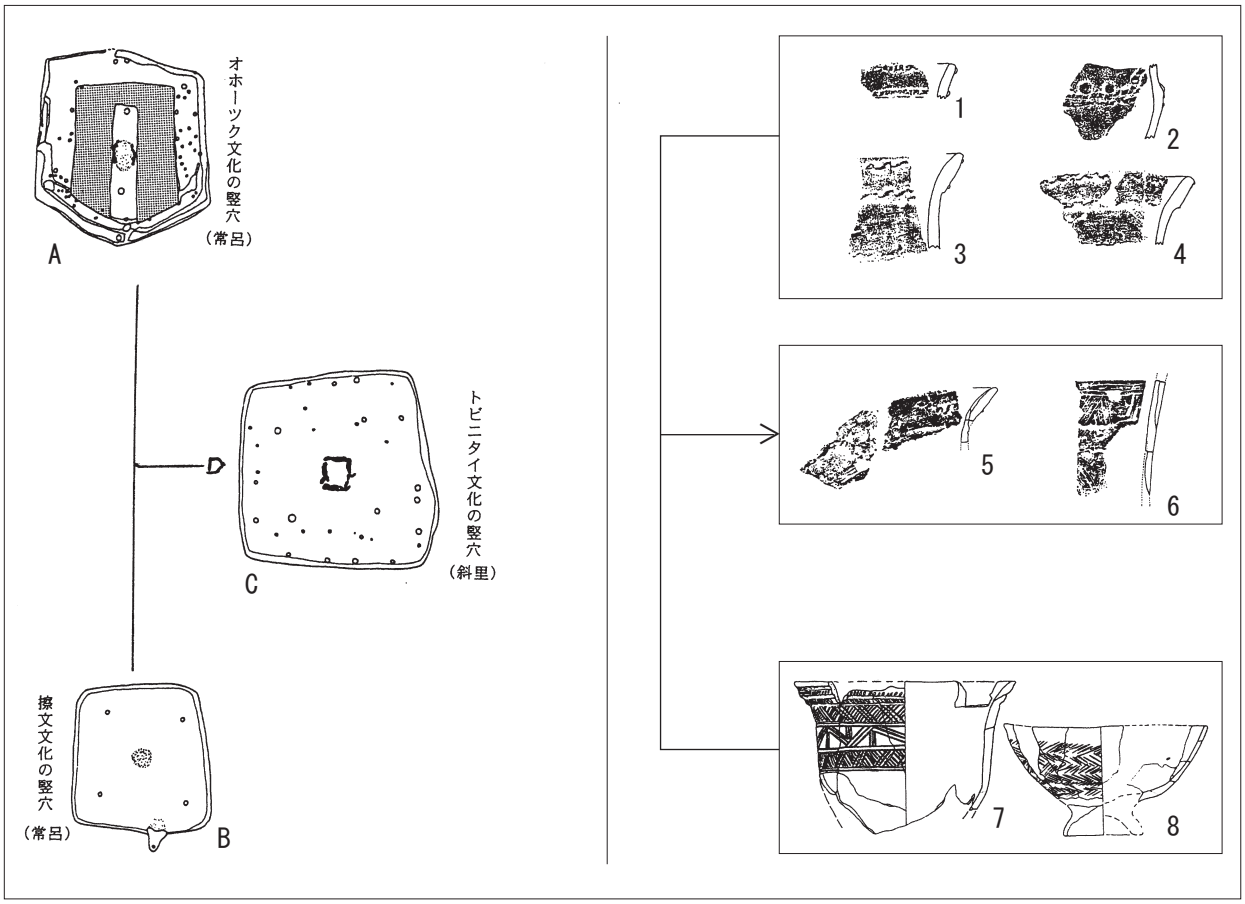
2）竪穴土器から見た編年観の疑問点〔第 13 図〕

引用された 3 点の土器標本は、トコロチャシ遺跡 1 号竪穴の内側床面（1）、トビニタイ遺跡 2 号竪穴床面（2）、栄浦第二遺跡 11 号竪穴の表土・埋土（3）から、それぞれ出土したものである。

トコロチャシ遺跡の内側竪穴は、先にも述べたとおり、刻紋土器～ソーメン紋土器（4 ～ 8）までの複数の床面土器を持つ。トビニタイ遺跡の 2 号竪穴も、知床半島のオタフク岩遺跡や標津町のふ化場第 1 遺跡の上げ土を利用した竪穴編年から見ると、複数の時期を含み、細かく変遷することが判明している（涌坂 1991・柳澤 2008a・2011d）。それをふまえると、「1 例→ 2 例」の序列は成り立つが、両者は近接しており、その間に「カリカリウス式土器群」（(1) ～ (8) 類：柳澤 2004・2010c：61-64）を介在させるための余地は存在しない。2 例と床面上で伴出した 9 ～ 12 例についても、同じ事が指摘される。



第 13 図　『北の異界』の接触・融合モデルの土器標本例と参照資料



第 14 図　竪穴の融合モデルと出土資料の対比

これに対して栄浦第二遺跡の 11 号は、ソーメン紋土器 1 期（13 ～ 15）の六角形の竪穴である。年代的には、ソーメン紋土器 2 の 1 例と近接するので、ほぼ同時代の竪穴が選択されていると言える。しかし、3 例は擦紋Ⅳの「古い部分」の一員で、Ⅳ（1）～（3）類（16・17 → 18・19 → 20）の内、20 例に対比されるものである。先の年代観によれば、おそらく 11 世紀代とされるものであろう。

このように観察すると、オホーツク系の貼付文（ソーメン紋）を持つ土器では 10 世紀代の年代観を採用し、擦文土器では、なぜ 10 世紀代に比定される高砂遺跡例（第 10 図 13）を 11 世紀代の栄浦第二遺跡例（3）と交換したのか、その点が疑問とされよう。一つの図式では、「接触」・「融合」・「同化」現象の一断面しか表示し得ない。したがって、ある時期の、いずれかの現象を選び、同時代の文物を用いて正確に図解されるべきであると言えよう。

3）竪穴住居跡から見た編年観の疑問点〔第 14 図〕

竪穴のトビニタイ文化へ移行する過程は、栄浦第二遺跡 8 号竪穴（A）、岐阜第二遺跡 16 号竪穴（B）、そして、ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）10 号竪穴（C）を用いて図式化されている。その解説を参照すると、

（1）擦文文化の竪穴（B）は隅丸方形で、カマドを設置し、地床炉をもつのが基本である。

（2）オホーツク文化の竪穴（A）は五角形ないし六角形で、コの字形の粘土貼り床をもち、石組炉を有するのが基本である。

（3）トビニタイ文化の竪穴（C）は擦文文化の隅丸方形を踏襲し、カマドや粘土貼り床を用いないのが基本であり、「両者の融合がここに見られる」（傍点は筆者）

と説明されている。土器標本では、以上の観察によると10・11世紀代の土器が接触・融合し、10世紀代のトビニタイⅡ式が成立する、と図解されていた。竪穴ではどうであろうか。栄浦第二遺跡8号竪穴では、擬縄貼付紋土器（1・2）とソーメン紋土器1（3・4）が床面上から出土している。A例のプランは、後者に属する竪穴として図示されたのであろう。次に岐阜第二遺跡16号では、床面上から擦紋Ⅳ⑺類が出土している。B例のプランはこの時期に属する、すなわち先の年代観では、11～12世紀の所産ということになる。

それでは、Cプランのピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）10号竪穴はどうであろうか。これは革紐状の波線を用いた土器（5）が出土しているので、中間の土器（トビニタイ土器群Ⅰ-Ⅱ）、すなわち11～12世紀に比定され、これに伴出した土器も同時代のものと見做されるであろう。

このように観察すると、竪穴の土器から見た場合、10世紀とされるソーメン紋土器1（3・4）と11～12世紀に比定される擦紋Ⅳ⑺類の竪穴（A＝B）が出会い、後者の時期にCプランの竪穴が成立した、と捉えていることになる。だが、ソーメン紋土器1の3・4例と擦紋Ⅳの7・8例が、仮に同時代に遭遇したと想定しても、トビニタイ土器群Ⅰ-Ⅱの5例が成立する必然性について、型式学的に説明することは困難であろう。筆者の編年観によれば、各竪穴の序列は、「Bプラン（7・8）→Cプラン（5・6）→Aプラン（3・4）」となり、前二者は11世紀代、後者は12世紀代に下ることになる。

その通りであれば、土器・竪穴の「接触」・「融合」・「同化」モデルは明らかに不成立となろう。『北の異界』においては、土器と竪穴標本の大幅な入れ替えが行われ、その結果として標本例の著しい年代差は縮小された。しかしながら河野編年以来の問題点、すなわち「接触」・「融合」・「同化」現象や「棲み分け」・「対立」的な状況を精密に解明する作業は、未だ十分に完了していないと言えるであろう。

6.『新北海道の古代（2）』（北海道出版企画センター　2003）の同化・融合編年

『北の異界』に続いて、宇田川洋氏と野村崇氏の編集による『新北海道の古代』2（続縄文・オホーツク文化）が刊行された。「トビニタイ文化」のコラム欄は澤井玄氏が担当し、オホーツク文化が「変容」し、擦文文化に「併呑」される過程について、詳しい解説を試みている。『北の異界』で示された説明とは細部で種々の変更が加えられている。しかし大筋において、大きな変化は認められない。以下、標本例を挿入しながら、その説明の妥当性について検討してみたい。

1）オホーツク土器からトビニタイ土器への移行期編年

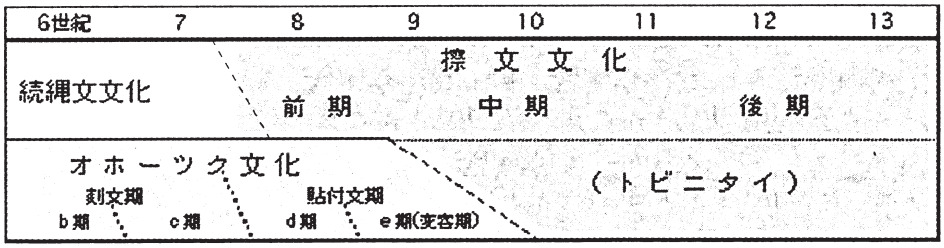
オホーツク文化と擦文文化の関係については、まず、世紀単位で編成された土器編年案〔**第2表**〕を示して、簡略に記述されている〔**第15図**〕（（ ）内の挿入は筆者）。

(1) オホーツク文化は5・6世紀から9・10世紀の文化とされ、土器編年では、藤本b～e群（藤本1966）の4段階に区分されている。

(2) 最後のe群（1～3）の時期には、この文化は「大きく変容する」（「変容期」：第2表）。

(3) トビニタイ土器は、「e群期かその直後の時期から、擦文文化期の終末期（13世紀頃）まで作られたと考えられている。」

その「e群かその直後」とは、おそらく、宇田川氏の言う「トビニタイⅡ式」よりも「古いタイプ」の「カリカリウス式土器群」（4～6）を指しているのであろう。しかしその標本例は本文中には掲載



第 2 表　オホーツク文化・擦文文化・トビニタイ文化のおおよその年代（澤井 2003）

されていない。

第 2 表を見ると、e 群（変容期）は 9 世紀末～ 10 世紀代とされ、その期間は、斜めの点線で示されている。この部分はおそらく、「カリカリウス式土器群」（4~6）だけではなく、「トビニタイⅡ式」（7 ～ 10）の古い部分も内包するのであろう。第 15 図の編年図表は、そのような理解を前提として、年代的な推移を斜めの標本列に配置して、やや模式的に示したものである。

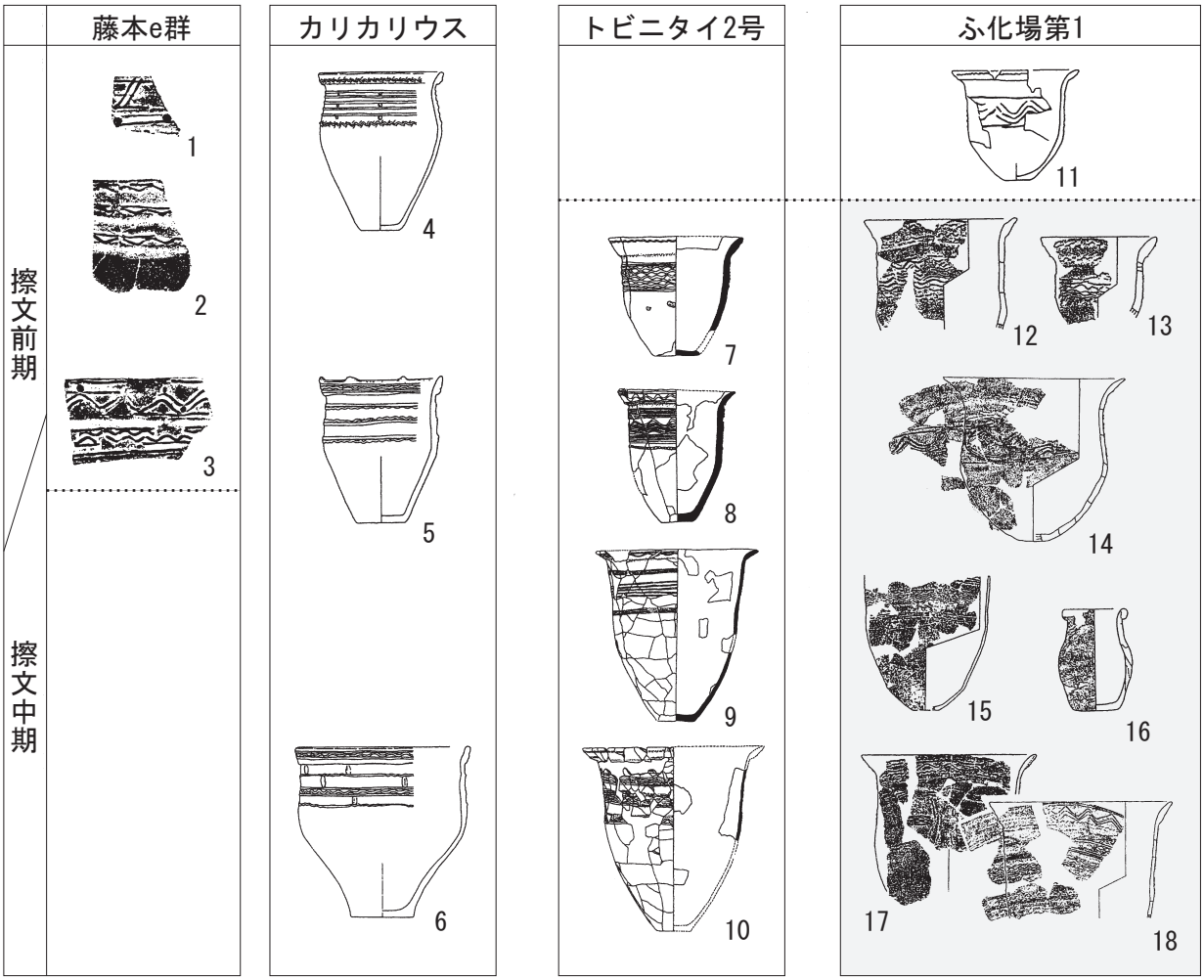
ただし、ソーメン文土器（1 → 2 ≒ 3）とカリカリウス式土器（4 → 5 → 6）、トビニタイⅡ式（7 → 8 → 9 → 10）は、それぞれスペースが許す範囲で新旧の序列順に配列してある。胴部に見える貼付紋の扱い方を型式学的に観察すると、ほぼ「2 例＝ 5 例」、「6 例＝ 10 例」の並行関係が想定される。また、ふ化場第 1 遺跡の調査成果では、「11 例→ 12・13 例（≒ 7 例）→ 14 例（＝ 8 例）→ 15・16 例（≒ 9 例）→ 17 例（=18 例＝ 10 例）」という序列が、すでに上げ土や火山灰の堆積秩序を利用して確認されている（柳澤 2008a・2010c・2011d）。

つまり、藤本 e 群が変容してカリカリウス式土器群へ、そして「トビニタイⅡ式」へ（1 ～ 3 例 → 4 ～ 6 例→ 7 ～ 18 例）と変遷するという、オホーツク式系土器の編年観は不成立であって、これら三者が併存し、多くの変遷を重ねることは、千葉大学考古学研究室による 7 次の発掘調査によって層序や火山灰などから明瞭に把握されている（千葉大学文学部考古学研究室 2005 ～ 2011）。したがって第 2 表の編年観では、これらの土器群の細分を徹底し、どの小細別の時期に、どのような接触と変容が生じたのか。その点を明確にする本格的な見直し作業が、これから求められることになろう。

2）土器と竪穴から見た、「変容」・「併呑」モデルについて

トビニタイ土器の変遷については、『北の異界』のような明瞭な模式図は示されていない〔**第 16 図**〕。解説によると、「文様はオホーツク土器（1）に特徴的な直線と波形の粘土紐の貼り付け文様と」「擦文土器的な線描きの文様がみられる」。そして「古い時期のものはオホーツク土器的であり、新しくなるにつれて擦文土器的な構成となる」として、1 ～ 3 の標本例が「写真 1」として図示されている。また「写真 3」には、「擦文化が進んだトビニタイ土器」として、4 例が掲げられている。この 4 例が、「新しくなると擦文的な構成となる」土器であり、「古い時期のもの」で「オホーツク土器的」なものが 3 例に相当し、さらに図示されていない「カリカリウス式土器群」（第 15 図 4 ～ 6）も、これに該当すると思われる。

そのように理解すると、これまでも「同化」・「融合」を示す標本例として伝統的に採用されて来た 2 例が、改めて問題となってくる（北海道開拓記念館編 1983：第 5 図、金盛 1987：第 7 図 10）。2 例はおそらく、解説文にある「線描きの文様」が見られる、「擦文土器」の一例として図示されたのであろう。これは擦紋Ⅳ（6）類に比定され、私見では 11 世紀代に編年される。したがって、先に 9 世紀末～ 10 世紀代とされた 1 例のソーメン文土器とは、とても同時代に「接触」・「融合」し得るとは



第 15 図　e 群（変容期）に想定される土器群の移行過程（澤井 2003 ～ 2012 より編成）

考えられない。

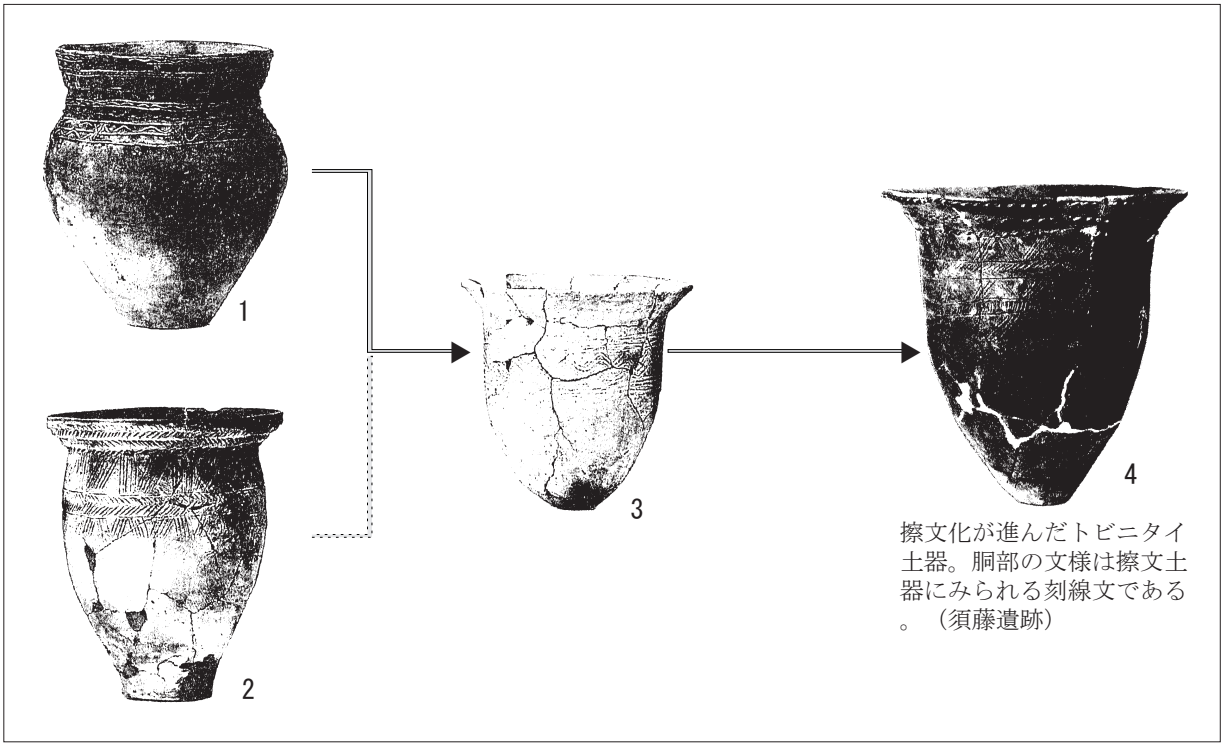
しかし先行する模式図では、擦文土器の標本例として 2 例と近い時期の標本例を採用していたことを想起すると、過去の事例を参照し、その模式図としての有効性を考慮して、改めて 1 例のソーメン文と 2 例の刻線文を標本例に採用した、とも推測される。もし、そのとおりならば、明らかに異時代の標本例を用いて、オホーツク式土器が「併呑」される過程を図式化し、解説したことになるであろう。果たして、そのように理解しても良いのであろうか。そこで今度は、竪穴の「変容」・「併呑」モデル〔**第 17 図**〕を参照し、さらに検討したい。このモデルは、先行する二つの模式図〔第 9 図・第 12 図〕のうち、主として後者（北海道開拓記念館編 1999）を改変したものと思われる。

(1) オホーツク文化：トコロチャシ遺跡 1 号竪穴（A：変更なし）

(2) 擦文文化：ライトコロ川口遺跡 2 号竪穴（B：9 号から 2 号へ変更）

(4) トビニタイ文化：ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）10 号竪穴（C：変更なし）

竪穴の標本はこのように選択され、新たに「骨塚・カマド・粘土貼床・石組炉」などのキャプションも加えられ、解説文の理解を容易にしている。図式の矢印からも分かるように、A プランと B プランの竪穴が出会い、その結果として、a）骨塚と b）粘土貼床、そして c）カマドが、それぞれの竪穴から消失し、C プランのトビニタイ文化の竪穴が成立した、と図解されている。



第 16 図 「擦文化」の土器標本例

そのプロセスは、次のように説明された。

(1) オホーツク文化はサハリンから北海道北端に伝播し、海岸沿いに根室半島まで広がり、数世紀の間、その状態で継続する。

(2) しかしトビニタイ土器を作り始める「9 世紀から 10 世紀頃には段丘上へ移動し、さらには海から数十 km も遡る内陸部にも遺跡を残すようになり」、「その生業は大きく変化した」と考えられる。

(3) トビニタイ土器の分布圏では、「擦文文化後期（「11 世紀頃以降」）の遺跡は数多く残されるが、中期以前の遺跡は少ない。そのためトビニタイ土器（トビニタイⅡ式：第 16 図 3）が成立したと考えられる 9 ～ 10 世紀頃は、擦文人がオホーツク人を数の上で圧倒するという状況ではなかったと考えられる。」

そして、中期以前のいまだ擦文人の人口が少ない時期には、

(1) オホーツク文化の e 期に至ると、大型住居に集住していたものが小型住居に分かれ、各地に散開して居住するように」なり、オホーツク人の社会的な紐帯が弱まる。「自らの文化を、トビニタイ土器を制作する前の段階で「変容」させる」

(2) それ以後、道東のオホーツク文化は、「トビニタイ化（＝「擦文化」）を加速させる。

一般に、道東におけるオホーツク文化の衰退ないし消滅は、擦文文化の圧倒的な勢力に押された結果である、と想定されている。澤井氏は、そのような大方の支持する仮説を退け、擦文人の人口が希薄な時期に、オホーツク文化の著しい変容を想定する。さらに人口が増大する後期以前に、オホーツク文化の「トビニタイ化」、すなわち「擦文化」（菊池 1972、宇田川 2008：167）が進行する、という解釈を述べる。これまで「接触」に始まり、数百年かけて緩慢に進行したとされる「融合・同化」の過程について、ほぼ同じ編年観に立脚しながら、全く異なる説明を試みている、と理解されよう。

それでは、未だ擦文文化の人口が希薄で「遺跡の規模」も小さい 9 ～ 10 世紀頃に、遺跡の立地を

大きく変更し、内陸部に進出した営みは、どのような根拠から「擦文化＝トビニタイ化」と捉えられるのであろうか。先に検討した編年表は不成立であるから、この仮説はまったく異なる編年秩序をもとに、改めて詳細に論証される必要があると言えよう。

次に「トビニタイ化＝擦紋化」の過程は、土器と異なり、竪穴からはスムーズに捉えられるであろうか。標本とされた竪穴では、次のような土器が出土している。

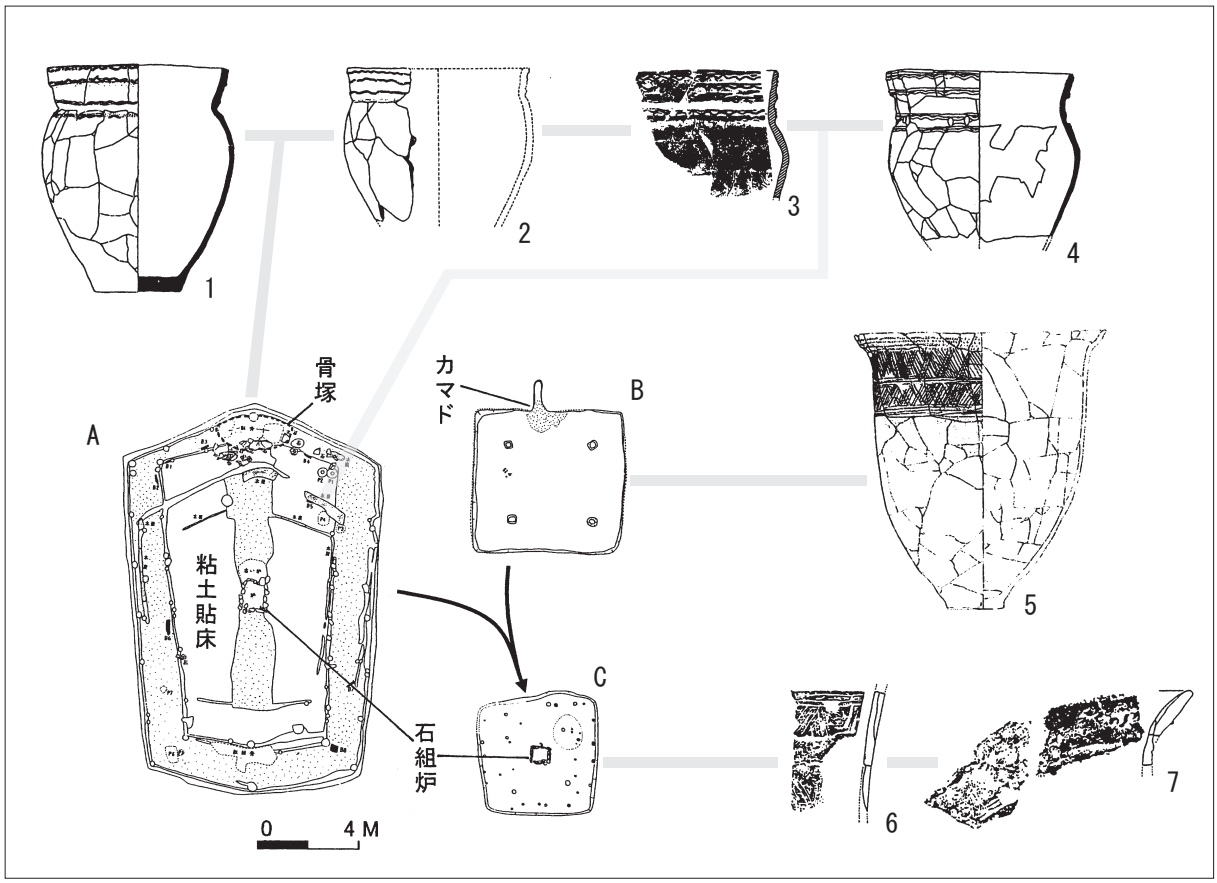
(1) トコロチャシ遺跡１号竪穴（A プラン）
　外側竪穴の床面：ソーメン文土器１（1・2）＝トビニタイ遺跡１号竪穴床面の土器群
　内側竪穴の床面：ソーメン文土器２（3・4）

(2) ライトコロ川口遺跡２号竪穴（B プラン）床面：擦紋Ⅳ（7）類（5）

(3) ピラガ丘遺跡（第Ⅲ地点）10 号竪穴（C プラン：トビニタイ土器群Ⅰ - Ⅱ（6）＝擦紋Ⅳ（末）(7)

斜里町においては、今のところ擦紋Ⅲ及びⅣ（1）～（3）類の時期に石囲炉を持つ竪穴は発見されていない。知床半島や標津から根室半島、釧路方面でも、また網走市や美幌町方面でも、そうした状況は少しも変わりない。したがって、9 ～ 10 世紀代に消滅したとされるオホーツク文化の竪穴（A プラン）から、骨塚と粘土貼床を除いて石囲炉だけを継承した竪穴が、擦紋Ⅳ（7）類の時期に突然に出現する、というような事は容易に想定できないと考えられる。

第 17 図は、時期を異にした A プランと B プランの竪穴が同時代に接触する。その結果、擦紋Ⅳの末期に C プランを用いるトビニタイ土器（Ⅰ - Ⅱ）期の「オホーツク系」の住民が登場した、という想定に基づいて構成されているのであろう。そのとおりであれば、「トビニタイ化＝擦文化」の過程、すなわち竪穴が「変容」・「併呑」される様子を読み取ることは困難であろう。また、土器や竪穴の標本が、いったいどの時点の関係性を示しているのかも、これまでの模式図と同様に判然としない。



第 17 図　竪穴の接触・融合モデルと出土土器

したがって2003年の時点においても、ルーツである河野広道の北方編年案に内包されていた、諸々の矛盾点や疑問点は、一向に解消される兆しが見えていないと言えよう。「11～12世紀の中国の遺品」（山内1969）と指摘された「遼時代の素焼き土器」などの渡来文物やウトロチャシコツ下竪穴の層位事実が、二ツ岩遺跡の調査後に一貫して等閑に附されるか、又は「忘失」され続けている現状と、こうしたステレオタイプな「接触・融合」模式図の在り方は、ある意味で不即不離の関係にあるのではなかろうか[10)]。

おわりに

北方編年の原点をなす河野広道の考案と、それを独自に改訂した石附喜美男、菊池徹夫の接触・同化・融合、駆逐編年論、そして、その体系を退け通説編年の原型となった北海道開拓記念館、知床博物館協会・東京大学総合博物館の図録に示された編年観が抱える問題点を探り、最後に概説書に示された北方編年観の一例について、種々の疑問点を明らかにした。

1955年から2003年に至る、半世紀を超える北方編年研究の歩みを、限られた紙幅でカバーすることには自ずと限界がある。本文において触れていない多くの業績があることは言うまでもない。それらを踏まえた上で、筆者は1999年以来、北方史の根幹をなす通説の編年体系について、繰り返し疑問を表明しているが、個々の物証についての議論と検証は、ごく最近の論考においても、未だ等閑に附されたままである。そこで広く公開された、展示図録類や概説書の編年模式図には何も問題点が無いのかどうか。具体的に標本例の分析を通じて検討を試みることとした。なぜ、「接触・融合・同化・駆逐」などの用語を以て説明される、「オホーツク文化」の変容過程は、同時代の文物を用いて明快な模式図として提示されないのか。

それに関連して注意されるのは、9世紀代とされるソーメン紋土器を出土する竪穴が、北見から根室半島の範囲で広く発見されているのに対して、それと同時代とされる「擦文前期（擦紋Ⅱ）」に属する単純な文化的内容の竪穴が、オホーツク海沿岸部において、不思議なことに一棟も検出されていない事である。さらにその時代の遺物は、何故かオホーツク文化期の竪穴の埋土中に混入して発見される事例が目立つ。擦文前期（擦紋Ⅱ）の沿岸部における単独竪穴の不在には、未だ認知されていない、しかるべき理由が隠れているのではなかろうか[11)]。

通説に立脚して、同時代の竪穴とその出土土器を以て、擦文前期（擦紋Ⅱ）の「接触」から「融合・同化」に至るまでのプロセスを、地域ごとに模式図として示すことが困難であるならば、大方が支持する道東の北方編年案には、新旧の序列に関して根本的な問題が伏在していることになるであろう。本論で述べた個々の細かな論点は、すでに旧稿において言及したものが多い。しかし、今回は新資料を随所に加えて、通説の道東編年体系に見える諸々の疑問点を、学史と型式論の観点から解き明かすことを主眼とした。

新しい北方史像の構築に係る基礎研究の進展に、少しでも役立つ論点があれば幸いに思う。

2012年1月10日稿

謝辞

小論の草稿については、千葉大学人文社会科学研究科の長山明弘・小林　嵩・松島沙奈・OBの佃竜太さんに、通読と校正のお世話になりました。末筆ながら謝意を表します。

註

1）四重に重複した 10 号竪穴については、河野に先立って名取武光が細かな観察を行い、つとに出土した土器の内容を明記したうえで、下床と上床の土器に明確な年代差があることを指摘している（名取 1948：209-2011）。

2）貝層の出土土器については、墳墓に伴うものも含めて、本報告に掲載された資料はごく少量に留まる。しかしながら 2 ～ 3 層又はそれ以上に分かれた各層を代表すると思われる標本例は抽出されている（柳澤 1999b）。藤本強は貝層土器群の実査に基づいて、それらの内容について興味深いコメントを記している（藤本 1965：18-21）。

3）投稿中の論文（『（千葉大学』人文研究』42：北方編年再考　その（11）　いわゆる「東大編年」と山内博士「北方編年」説の相克）を参照されたい。

4）「共伴」とされた 8 例（石附 1969：69）のうち、確実視できるものはウトロ滝の上遺跡に限られる。その他の事例については、少なくとも「共伴」であるのか、それとも「混在」であるのか、改めて型式学的な検証が必要であると思われる。

5）誤読ないし見落としのルーツは、いわゆる東大編年にたどられる。註 3）の論考を参照されたい。

6）その後、石附は「接触・融合」をめぐる編年案の整備に努めているが。諸々の疑問点はそのまま継承されている（石附 1982・1984）。

7）石附編年と同様に、菊池氏の独自編年についても、その原型は、河野広道の 1955・1958 年編年の具体化作業に由来するが、本稿ではその詳細に及ばない。なお菊池編年の成り立ちと疑問点については、旧稿ですでに検討を試みている（柳澤 2008a：1-5）。

8）糸切り底の「土師器坏」については、旧稿で繰り返し検討している（投稿中の小論でも、その学史上の意義について少しく考察を試みた）。（註 3）の文献を参照されたい。

9）第 9 図に見える竪穴の同化モデルは図録刊行の翌年、アイヌ民族文化の指導資料にも引用されている（菊池 2000）。それ以後、土器標本例と共に、博物館展示のパネル作成や概説書の執筆に際して、しばしば参照されるようになった。

10）澤井氏の編年観は、その後に新しく広域的な編年体系として発表されている（澤井 2007）。それを参照しても、7 ～ 13 世紀（擦文前期～晩期）された標本例と、その年代的な配置に関しては、第 2 表と同様の問題点が見受けられる。後日、別の主題を扱う際に改めて触れる機会を持ちたい。

11）この点に関しては旧稿において、通説を見直すうえで重要な論点であることをつとに指摘している（柳澤 2005a：127-128、藤本 1972）。

引用・参考文献

天野哲也　1979「オホーツク文化の展開と地域差」『北方文化研究』12

石附喜三男　1969「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」『北海道考古学』5

石附喜三男　1982「オホーツク文化と擦文文化・アイヌ文化の関係」『シンポジウム　オホーツク文化の諸問題』 学生社

石附喜三男　1984「擦文式土器の編年的研究」『北海道の研究』（考古編 2）　清文堂出版

右代啓視　1991「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』19

右代啓視　1995「オホーツク文化にかかわる編年対比」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』 北海道開拓記念館

右代啓視　1999「オホーツク文化」『アイヌ文化の成立』（常設展示解説書 2）　北海道開拓記念館

宇田川　洋　1971『オタフク岩遺跡』『羅臼町文化財報告』1

宇田川　洋　1977「擦文期（北海道考古学講座 7）『北海道史研究』13

宇田川　洋　1979「’70 年代擦文文化の研究」『季刊ドルメン』22

宇多川　洋　1988『アイヌ文化成立史』 北海道出版企画センター

宇田川　洋　2002「もう一つの日本列島史」・「オホーツク人のゆくえ」『北の異界　－古代オホーツクと氷民文化－』 東京大学出版会

宇田川　洋　2008「擦文・オホーツク・トビニタイ文化」『知床の考古』 斜里町立知床博物館

宇田川　洋編　1981『河野広道ノート　考古篇 1』 北海道出版企画センター

宇田川　洋・沢　四郎・豊原熙司 1971『弟子屈町下鐺別遺跡発掘報告』 弟子屈町教育委員会

大井晴男　1970「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』4

大井晴男　1972a「北海道東部における古式の擦文式土器について　－擦文文化とオホーツク文化の関係について　補論 1 －」『北方文化研究』6

大井晴男　1972b「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について　－擦文文化とオホーツク文化の関係について　補論 2 －」『北方文化研究』6

大井晴男　1994「搬入土器と模作土器と「型式論」のためのノート（2）」『弥生』23

大井晴男編　1982『オホーツク文化の諸問題　－その研究史的回顧－』 学生社
大阪市立博物館編刊　1970 『謎のオホーツク海文化』(第 45 回　特別展)
大西秀之　1996a「トビニタイ土器分布圏の諸相」『北海道考古学』32
大西秀之　1996b「トビニタイ土器分布圏における“擦文式土器”の制作者　－異系統土器製作技術の受容に見られる集団関係」『古代文化』48-5
大西秀之　2001「“トビニタイ文化”なる現象の追及」『物質文化』71
大西秀之　2003「“トビニタイ文化”集落における居住者の出自と世帯構成」『日本考古学』16
大西秀之　2004「擦文文化の展開と“トビニタイ文化”の成立　－オホーツク文化と擦文文化の接触・融合に関する一考察」『古代』115
大西秀之　2006『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』 同成社
大場利夫　1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北方文化研究報告』11
大場利夫　1960「元町遺跡」･「湖南遺跡」『女満別遺跡』 女満別町教育委員会
大場利夫・児玉作佐衛門　1956「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』11
小平町教育委員会編　1983「おびらたかさご　擦文時代の集落跡」『小平町文化財調査報告』1
金盛典夫　1974「ピラガ丘遺跡第Ⅲ地点について」『しれとこ資料館報告』1　斜里町立知床資料館
金盛典夫　1976a『ピラガ丘遺跡　－第Ⅲ地点発掘調査報告－』 斜里町教育委員会
金盛典夫　1976b「トビニタイ土器群の編年的な位置について」『ピラガ丘遺跡　－第Ⅲ地点発掘調査報告－』
金盛典夫　1981「須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書」『斜里町文化財報告』1
金盛典夫編　1987『消えた北方民族　－オホーツク文化の終えん－』 知床博物館協会
金盛典夫・椙田光明　1984「オホーツク文化の終末と擦文文化の関係」『考古学ジャーナル』235
菊池徹夫　1970「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」『物質文化』15
菊池徹夫　1972a「トビニタイ土器群について」『常呂』 東京大学文学部
菊池徹夫　1972b「11 号・12 号およびその発掘に伴って発見された遺構群について」『常呂』 東京大学文学部
菊池徹夫　1977「オホーツク文化と擦文文化・アイヌ文化の関係」『シンポジウム　オホーツク文化の諸問題発表要旨』北海道大学文学部附属北方文化研究施設
菊池徹夫　1978「オホーツク文化の住居について」『北方文化研究』12
菊池徹夫　1982「オホーツク文化と擦文文化・アイヌ文化の関係」『シンポジウム　オホーツク文化の諸問題』 学生社
菊池徹夫　1989「オホーツク文化」『よみがえる中世』4 (北の中世　津軽・北海道) 平凡社
菊池徹夫　1996「「擦文以後」をめぐって」『博物館フォーラム　アイヌ文化の成立を考える』 北方道立民族博物館
菊池徹夫　1999「北日本の考古学　－教科書にない日本史－」『発掘された古代の日本』 日本放送協会
菊池徹夫　2000「1 ～ 13 世紀の文化」『アイヌ民族に関する指導資料』アイヌ文化振興・研究推進機構
熊木俊郎　2000「香深井 5 遺跡出土「元地式」土器について」『香深井 5 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
河野広道　1935「北海道土器時代概要」『ドルメン』4-7
河野広道　1949「北海道の先史時代」『北海道先史学十二講』 北方書院
河野広道　1955「先史時代史」『斜里町史』(第 1 編) 斜里町
河野広道　1958「先史時代篇・原史時代篇」『網走市史』 網走市役所
河野広道・名取武光　1948「北海道の先史時代」『人類学先史学講座』6
児玉作佐衛門　1948『モヨロ貝塚』 北海道原始文化研究会出版部
後藤寿一　1934「北海道先史時代に就いての私見」『考古学雑誌』23-6
駒井和愛　1948a「オホーツク式遺跡と大陸的遺物」『歴史』1-2
駒井和愛　1948b「北海道モヨロ貝塚発掘」『考古学雑誌』35-1･2
駒井和愛　1963『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(上巻) 東京大学文学部
駒井和愛編　1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(下巻) 東京大学文学部
犀川会編　1933『北海道原始文化聚英』 民俗工芸研究会
榊田朋広　2006「トビニタイ式土器における文様構成の系統と変遷」『物質文化』82
榊田朋広　2007「異系統土器論からみたトビニタイ式土器と擦文土器の型式間交渉と動態」『物質文化』84
榊田朋広　2010「トビイタイ文化研究の現状と課題」『異貌』28
佐藤達夫・駒井和愛　1964「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(下巻) 東京大学文学部

斎藤　忠　1933「千島択捉島出土の土器及石器」『考古学雑誌』23-6
澤井　玄　1992「「トビニタイ土器群」の分布とその意義」『古代』93
澤井　玄　1995「北海道内のオホーツク文化の変容について」『環オホーツク』3
澤井　玄　1998「北海道東部における擦文文化の拡散と終末」『野村崇先生還暦記念論文集　北方の考古学』 同刊論文集行会
澤井　玄　2003「トビニタイ文化」『新北海道の古代』2（続縄文・オホーツク文化） 北海道新聞社
澤井　玄　2007「北東日本海域の古代・中世土器編年　－北海道内の7～13世紀の土器編年について－」『北東アジア交流史研究－古代と中世－』 塙書房
澤井　玄　2012「千島列島出土の擦文土器」『サハリンと千島の擦文文化の土器　－サハリンと千島へのアイヌ民族の進出－』 函館工業高等専門学校
椙田光明　1982『史跡標津遺跡群　伊茶仁カリカリウス遺跡発掘調査報告書』 標津町教育委員会
椙田光明　1981「伊茶仁ふ化場第1遺跡」『標津の竪穴』4　標津町教育委員会
瀬川拓郎　2005a『アイヌ・エコシステムの考古学』 北海道出版企画センター
瀬川拓郎　2005b「同化・変容・残存　－住居にみるアイヌ文化の成立過程」『海と考古学』
千葉大学文学部考古学研究室編　2005～2011『北海道標津町　伊茶仁ふ化場第1遺跡（第1～7次発掘調査概報）』
東京大学文学部考古学研究室編　1972『常呂』 東京大学文学部
東京大学文学部考古学研究室編　1980『ライトコロ川口遺跡』 東京大学文学部
名取武光　1948a『モヨロ遺跡と考古学　－私たちの研究－』 札幌講談社
名取武光　1948b「北海道モヨロ貝塚とオホーツク式文化」『民族学研究』12-4
名取武光・大場利夫　1964「モヨロ貝塚の文化遺物」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下）』 東京大学文学部
野村　崇・平川善祥　1982「二ツ岩遺跡」『北海道開拓記念館研究報告』7
馬場　脩　1934「北千島占守島に於ける考古学的調査報告」『人類学雑誌』49-2
平光　吾一　1929「千島及び弁天島出土土器破片に就いて（1）」『人類学雑誌』44-4
藤本　強　1965「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』6
藤本　強　1966「オホーツク土器について」『考古学雑誌』51-4
藤本　強　1972a「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』 東京大学文学部
藤本　強　1972b「調査の経過と問題点の摘出」『常呂』 東京大学文学部
北海道開拓記念館編　1983『発掘された北の文化　－続縄文・擦文・オホーツク文化－』（第23回　特別展）
北海道開拓記念館編　1999『アイヌ文化の成立』（常設展示解説書2）
松田　功・村本周三ほか　2011「ウトロ遺跡」『斜里町文化財調査報告』32
柳澤清一　1999a「北方編年小考　－ソーメン紋土器とトビニタイ・カリカリウス土器群の位置－」『茨城県考古学協会誌』11
柳澤清一　1999b「北方編年研究ノート　－道東「オホーツク式」の編年とその周辺－」『先史考古学研究』7
柳澤清一　2000「南千島から利尻島へ　－道東編年と道東編年の対比－」『東邦考古』24
柳澤清一　2001「礼文・利尻島から知床・根室半島へ　－道北・道東「オホーツク式」・トビニタイ・擦紋土器編年の対比－」『先史考古学研究』8
柳澤清一　2003「北方編年再考　その（1）　川西遺跡編年と「オホーツク式」伴出事例の謎」『（千葉大学）人文研究』32
柳澤清一　2004「北方編年再考　その（2）「トビニタイ・カリカリウス土器群」の細分について」『（千葉大学）人文研究』33
柳澤清一　2005a「北方編年再考　その（3）　－斜里地方における「トビニタイ土器」の細分について－」『（千葉大学）人文研究』34
柳澤清一　2005b「擦紋末期土器と「トビニタイ土器群Ⅱ」の成立　－根室半島から知床半島・斜里方面へ－」『千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』96（北方文化の中のアイヌ）
柳澤清一　2006a「道北における北方編年の再検討　その（1）　モヨロ貝塚から内路・上泊遺跡へ」『古代』119
柳澤清一　2006b「北方編年再考　その（4）　北海道島・南千島における北大式～擦紋Ⅳ期の広域編年－北海道島人と「オホーツク人」の接触を探る－」『（千葉大学）人文研究』35
柳澤清一　2006c『縄紋時代中・後期の編年学研究　－列島における小細別編年網の構築をめざして－』 平電子印刷所
柳澤清一　2007a「北方編年再考　その(5)　二ツ岩遺跡編年の再検討－擦紋Ⅲ期における道東と道央の対比－」『（千葉大学）人文研究』36
柳澤清一　2007b「「ヒグマ祭祀遺構」出土のトビニタイ土器群Ⅱの位置」『物質文化』83
柳澤清一　2007c「北方島嶼の先史考古学」『北海道大学総合博物館ニュース』15

柳澤清一　2008a「北方編年再考　その（6）　トビニタイ土器群Ⅱの小細別編年について」『（千葉大学）人文研究』37
柳澤清一　2008b「「カリカリウス土器群」の小細別編年について」『物質文化』85
柳澤清一　2008c『北方考古学の新地平　－北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し－』　六一書房
柳澤清一　2009a「道北における北方編年の再検討　その（2）　－新しい青苗砂丘遺跡編年と北方古代史研究－」『古代』122
柳澤清一　2009b「北方編年再考　その（7）　擦紋Ⅱ期における道央・道北、サハリン島南部の編年対比」『（千葉大学）人文研究』38
柳澤清一　2010a「道東擦紋Ⅳ期における小細別編年の検討（予察）」『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』128
柳澤清一　2010b「擦紋Ⅲ期における環宗谷海峡圏編年の検討」『比較考古学の新地平』同成社
柳澤清一　2010c「北方編年再考　その（8）　道東における新北方編年体系の検証－灰白色（Ma-b）火山灰を「鍵」層として－」『（千葉大学）人文研究』39
柳澤清一　2011a「北方編年再考　その（9）　擦紋Ⅳ期における擬縄貼付紋土器の小細別編年」『（千葉大学）人文研究』40
柳澤清一　2011b『北方考古学の新展開』　六一書房
柳澤清一　2011c「道北編年の再検討　その（3）「「南貝塚式」から見た環宗谷海峡編年案の検討－道央から礼文島・モネロン島・サハリン島へ－」『古代』124（奥付：2010.9）
柳澤清一　2011d「道東部における竪穴住居跡の変遷とトビニタイ土器群Ⅱの成立　－知床・斜理・標津を中心として－」『物質文化』91
柳澤清一　2012a「環根室海峡圏における貼付紋系土器の対比－南千島への「駆逐・移動」説をめぐって－」『千葉大学文学部考古学研究室三十周年記念　考古学論攷Ⅰ　－岡本東三先生の退職とともに－』　六一書房
柳澤清一　2012b「［北方編年再考　その（10）］　北見国「枝幸1・2・5号竪穴」出土土器の検討」－「南貝塚式」と「終末期」の擦紋土器をめぐって－『（千葉大学）人文研究』41
柳澤清一　2012c「旧常呂町・斜理町における新北方編年案の検証　－「Ma-b」・「Km-5a」火山灰を「鍵」層として－」『古代』126（奥付、実際の刊行：2011.11 → 2012.5）
柳澤清一　2012d「新北方編年案とB-Tm火山灰から見た蕨手刀の副葬年代　－青苗砂丘遺跡から目梨泊遺跡・モヨロ貝塚へ－」『古代』126（奥付、実際の刊行：2011.11 → 2012.5）
柳澤清一　2012e「ウサクマイN遺跡出土のソーメン紋土器の年代　－土器から見た「B-Tm」火山灰の疑問点－」『古代』127（奥付、実際の刊行：2012.1 → 2012.5）
柳澤清一　2012f「いわゆる「元地式」（「接触様式」）編年の再検討」『古代』128（奥付、実際の刊行：2012.2 → 2012.5）
柳澤清一　2013a「佐藤達夫のポスト「擦紋Ⅴ」期編年の成り立ち」『岡内三眞先生古稀記念論集　技術と交流の考古学』　同成社（印刷中）
柳澤清一　2013b「北方編年再考　その（11）　いわゆる「東大編年」と山内博士の「北方編年」説の相克」『（千葉大学）人文研究』42（印刷中）
山内清男　1933「日本遠古之文化　7」『ドルメン』2-2
山内清男　1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1
山内清男　1939『日本遠古之文化』（補註付・新版）　先史考古学会
山内清男　1964「縄紋式以後の文化」『日本原始美術』1（縄文土器）　講談社
八幡一郎ほか　1966『北海道根室の先史遺跡』（『東京教育大学文学部考古学研究報告』1）　東京教育大学
米村　衛・梅田広大　2009『史跡　最寄呂貝塚史跡等登録記念物保存風理事行発掘調査報告書』　網走市教育委員会
米村喜男衛編　1949「モヨロ貝塚調査団員座談会　モヨロ貝塚を探る」『北海道先史学十二講』　北方書院
米村喜男衛　1970『ピラガ丘遺跡』　斜里町教育委員会
米村哲英ほか　1972『ピラガ丘遺跡　第Ⅱ地点発掘調査概報』　斜里町教育委員会
涌坂周一　1991「オタフク岩遺跡」『羅臼町文化財報告』14

図版出典

第1図　1～6・21：河野（19555・1958）　A・B：平光（1929）　7～13：宇田川編（1981）　14：馬場（1934）　15・18：斎藤（1933）　16：大場（1956b）　17・19：駒井編（1964）　20 犀川会編（1933）

第2図　1・2・6・7：大場（1960）　3～5：駒井編（1963）　8・9：八幡編ほか（1966）　10：大井編（1982）　11～21：駒井編（1964）　22～26：藤本（1966）

第3図　1～13：駒井編（1964）　14：宇田川（1971）16：宇田川ほか（1971）　15・23～27：駒井編（1963）　17～22：藤本（1966）　28～30：八幡ほか（1966）

第4図　1～15・23・24・27～31：駒井編（1964）　16～22：藤本（1966）　25・26：大場・児玉（1956）

第5図　1～5：北海道開拓記念館編（1983）

第6図　1～3：北海道開拓記念館（1983）　4～11：野村・平川編（1982）　12・13：金盛（1976a）14～18：金盛（1981）

第7図　1～12：金盛（1987）

第8図　1・2・4・6：金盛（1987）　3：児玉（1948）　5：駒井編（1964）　7・8：金盛（1976a）9：米村・梅田（2009）　10～15：松田・村本（2011）

第9図　1～3・A～C：北海道開拓記念館編（1999）

第10図　1・10・13：北海道開拓記念館編（1999）　2～9：野村・平川編（1982）　11・12：金盛（1976a）　14～17：小平町教育委員会編（1983）

第11図　1～5：駒井編（1964）　6～8：金盛（1976b）9～12：東京大学文学部考古学研究室編（1980）

第12図　1～3・A～C：宇田川（2002）

第13図　1・2・4～12：駒井編（1964）　3・13～15：東京大学文学部考古学研究室編（1972）　16～20：柳澤（2010a）

第14図　A～C：宇田川（2002）　1～4：東京大学文学部考古学研究室編（1972）　5・6：金盛（1976a）7・8：駒井編（1963）

第15図　1～3：藤本（1966）　4～6：椙田（1982）　7～10：駒井編（1964）　11：椙田（1981）　12～18：千葉大学文学部考古学研究室編（2005～2011）

第16図　1～4：澤井（2003）

第17図　1～4：駒井編（1964）　5：東京大学文学部考古学研究室編（1980）　6・7：金盛（1976a）A～C：澤井（2003）